

291.08  
D17  
DN





貴族院  
函  
号  
冊



院族

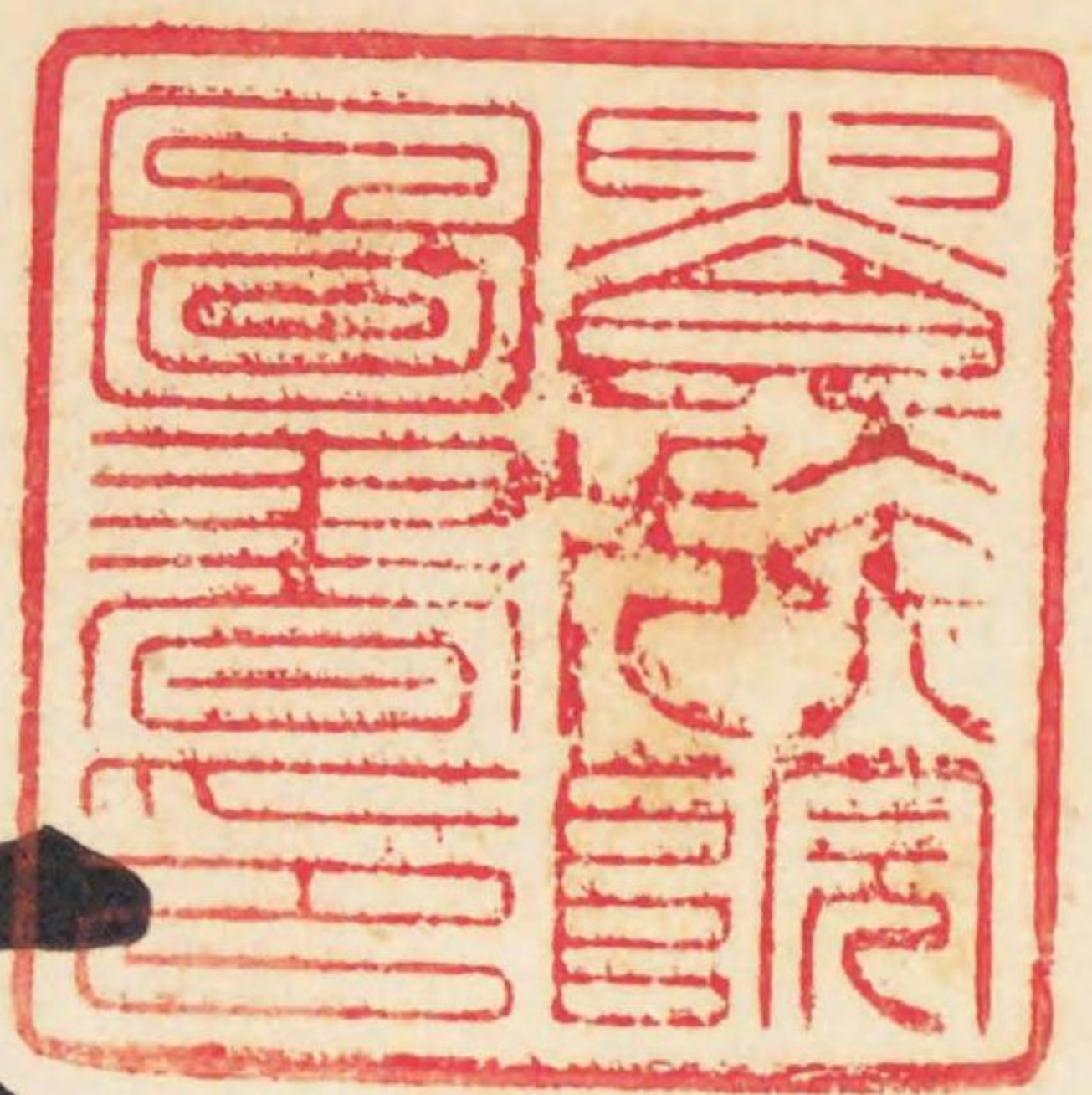


# 大日本地誌大系

諸國叢書本會之系  
本會編輯所編會  
本會發行  
本會古蹟記



院  
族



# 大日本地誌大系

諸國叢書木曾之貳  
木曾路名所圖會  
木曾古道記



291.08

D17

DN



707245

大日本諸國叢書木曾之貳例言

- 一 本卷には、左の三種を收めたり。  
 木曾路名所圖會 卷之四より終まで  
 木曾考 全  
 木曾古道記 全
- 一 木曾考は、寶永三年山村良景の編纂に係る。良景は山村良忠の長子にして、天和三年四月を以て生れ、寶永七年七月に卒す。通稱を甚兵衛といふ。山村氏もと木曾家に仕へ、徳川氏に至りて木曾の代官となり、世々之を襲ぎ終に良景に至る。木曾古道記は、木曾の人園原舊富の撰にして、其著作の年代は恐らくは寛政の頃なるべし。
- 一 木曾考及木曾古道記の二書は、尾州徳川侯爵家の藏本を以て底本となし、一二の流布本を以て校訂を試みたり。
- 一 本卷の體裁、既刊地誌大系と同一ならざるは、一に印刷上の都合に因れるなり。
- 一 卷末に收むる總目錄は、何れも原本になきものにして、唯閱覽の便宜上新に作製

例言

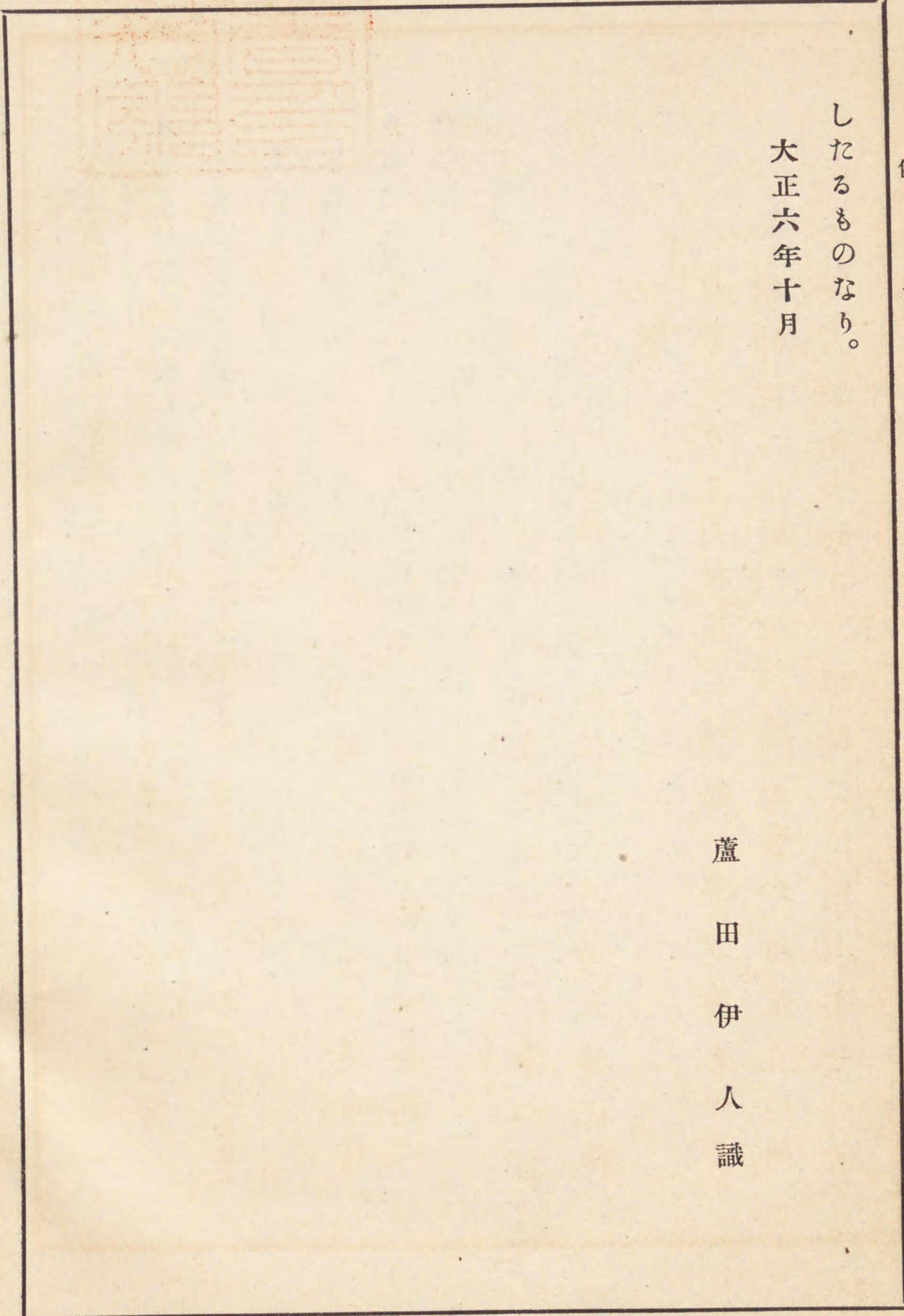
一



したるものなり。

大正六年十月

蘆田伊人識



木曾路名所圖會卷之四

上坂方神社 下坂方より三里あり延喜式名神大月次二座

新葉 あはれなる瀬波の糸乃みくを志す有る神のちりひ

宗良親王

祭神 健御名方命

續日本紀

兼和九年四月授无位勲八等南方刀美命神

從五位下同十月授无位健御名方富命前八

坂刀賣神從五位下

文德實錄

嘉祥三年十月授兩神並從五位上仁壽元十

月進兩大神階加從三位同八月兩大神祝預

把笏

三代實錄

貞觀元年正月授正三位勲八等建御名方富

命神從二位從三位八坂刀賣命神正三位同

二月授兩大神正二位從二位同七年七月當

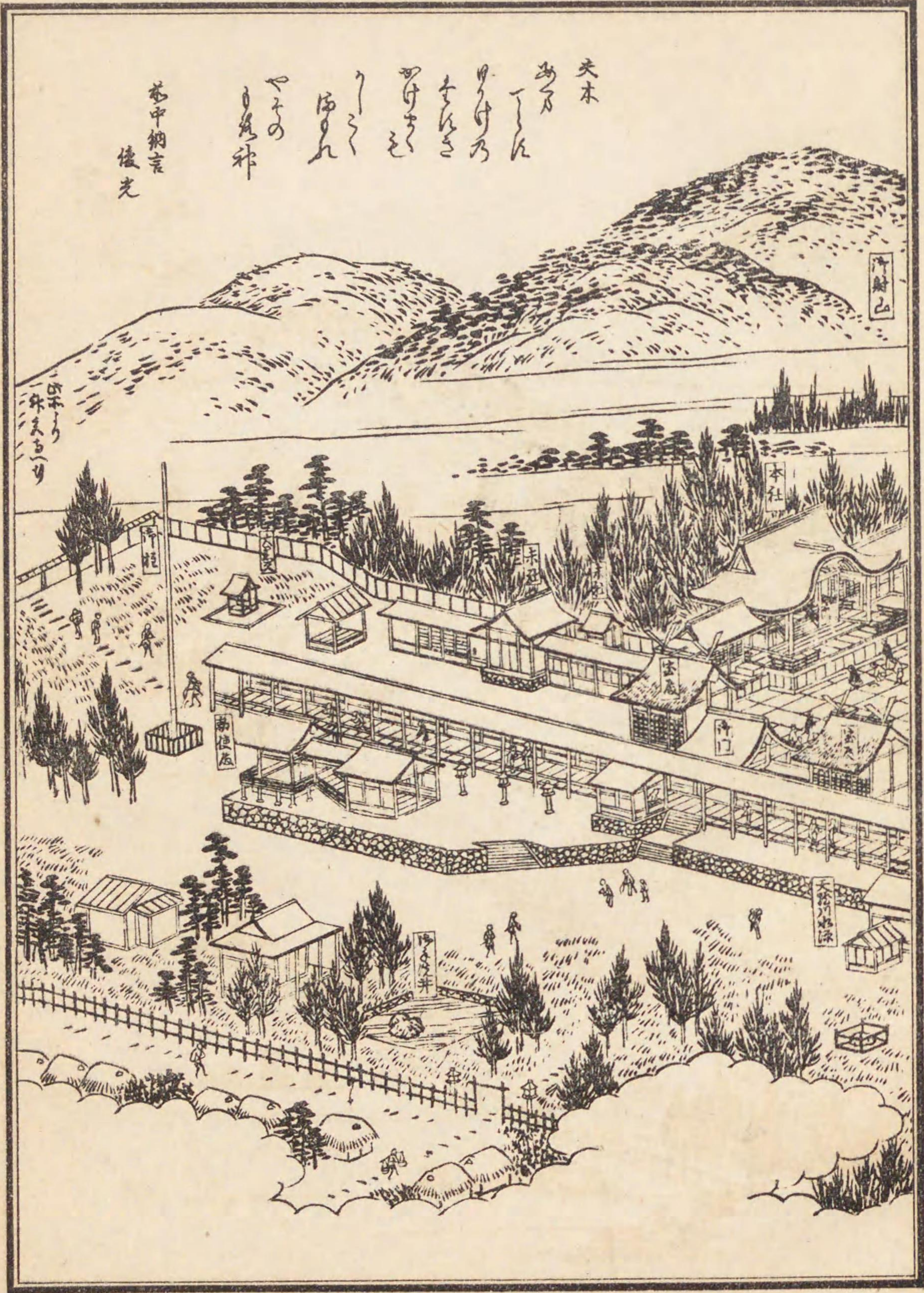
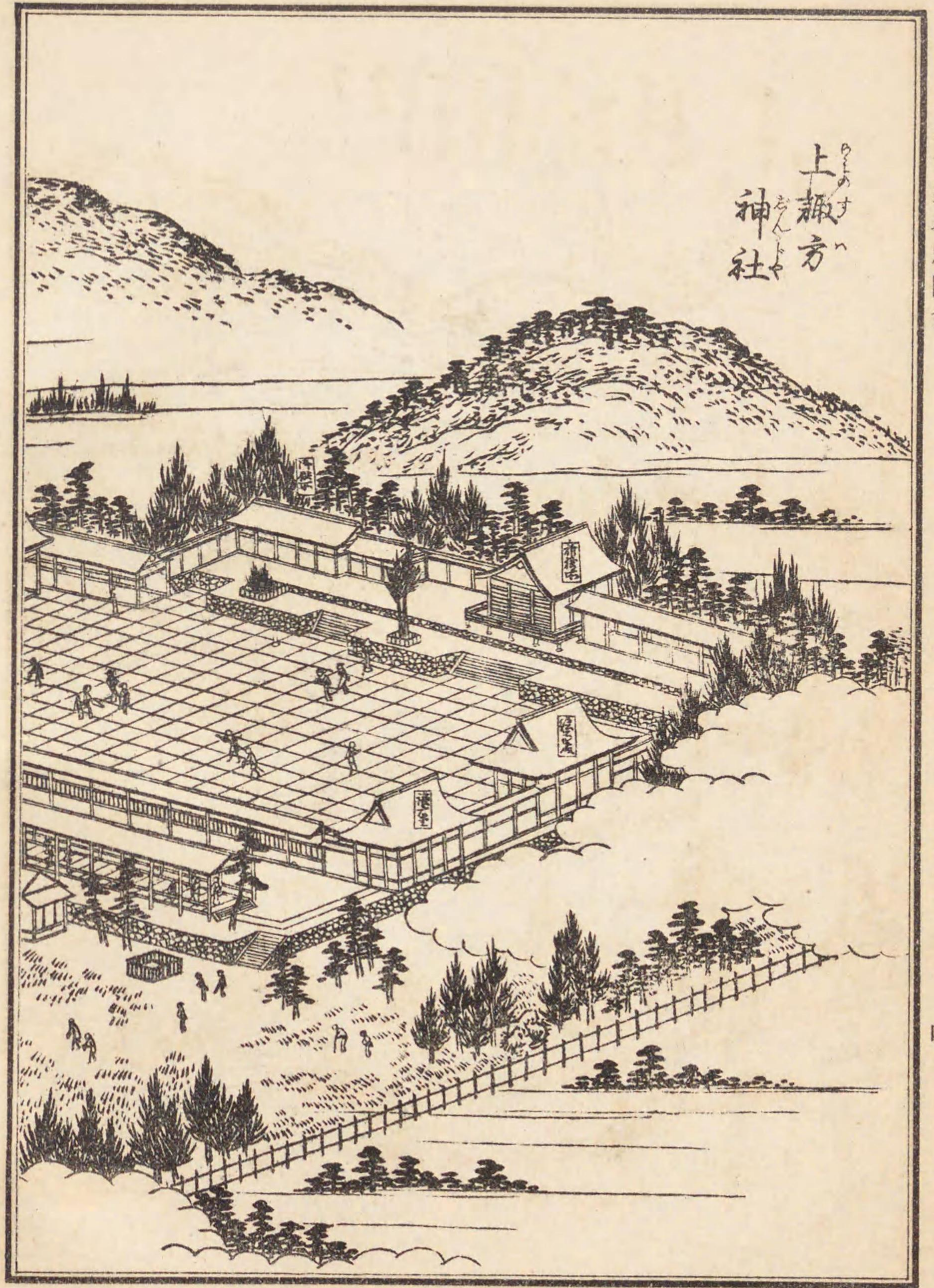


郡水田三段為南方刀美神社田同九年三月  
 進兩神階加從一位正二位云  
 拜殿南面美濃神樹神樹し秋那三階の樹  
 御供所殿の末  
 文庫石の跡  
 祈禱所石の跡  
 繪馬殿殿の末  
 護摩堂法馬殿の末  
 三十九間廊下三十九所の末社あり  
 所政大明神

前宮社	砥並社	若御子社	柏手社
楠井社	大歳社	荒玉社	千野河社
溝上社	瀬大社	玉尾社	穗護社
藤島社	内御玉社	鷄冠社	酢藏社











上藏方  
神宮  
寺





習燒社	御座石	御飯穀	相幸社
若宮社	大西御庵	山御庵	御佐久田
關庵	八劔社	小坂禎守	鷲宮明神
萩宮明神	達屋明神	酒室明神	下馬明神
御室明神	御賀摩明神	砥並山神	義會會美酒
神殿中郡屋	長廊社	以上一棟廊下之側に鎮座す	
大福殿	廊下の入口		
御柱	廊下の内		
大黒天社	幸社の外より		
勅使殿	其外未社二番		
六角井	社内東方		
神樂殿	日東の方		
御手洗井	六角井より		
	勅使殿の傍より		

**金堂** 神宮の西の山にあり  
**五重塔** 幸宮の傍にあり  
**鐘堂** 鐘の傍にあり  
**釋迦堂** 石殿の下  
**大昨堂** 釈迦堂の西より  
**神宮寺** 真言宗  
 尚社と料所の園一の宮ありて特小上訴方と神領度くして  
 社美藤かり例祭と年中七十五夜あり其中小毎茶三月間之  
 三ッあり中と用也二ッあり初を用也麻の頭と七十五組木の神  
 小供と又別麻の肉は料理一ッあり社人も其麻の肉を食は他人  
 麻肉を小獸と喰んとする所は神小形して社人より箸を交て喰は  
 據形一ッあり上下七奉に一度申奉御柱とて大祭  
 あり遠近四方より詣人多く集む其祭式者多しり爰小古本



より申傳ふ七不思儀やうふ幸なり新傳御渡八榮給御作田  
 浮橋根入松御射山湯に清濁等なり清渡と信濃と日幸  
 乃く宿地をくして寒き清渡に關するは諏方の船乃くふをくたて  
 水よりて舟二百若鷹乃く舟四又日の頂上の船より下れ船方らん  
 方小横幅五尺をくたる本名をく通るや氷の上小あとな  
 是なるに種別年必あり舟橋の幸これを清渡とく又神先とも  
 つよ清渡のく後人ける清渡を内之渡は水乃くく幸に  
 よるて清渡のく上の諏方よる幸のくりし下の船方の方小  
 清渡ある新とく其新ありて幸の豊凶然志かると清渡  
 一文字小清渡或はゆひ幸あり

和國へ山路五里八町諏方の駅一千軒并もあり吾人多く旅舎  
 小出女あり夏敷あり少あれどもさげ宮作て寒烈し

北の坂の下に小清渡あり

諏方春宮 毎春正月朔日小清渡に

下諏方  
 信濃  
 濃

祭神上諏方と同神 神樂殿 四郡 神樂殿  
 安社 護摩堂 伊勢兩宮 諏所 電殿

諏方秋宮 秋中あり毎年七月朔日ありふうはちをれ秋夜神樂  
 秋宮にありせしむるは七月朔日あり秋夜神樂あり  
 秋宮にありせしむるは七月朔日あり秋夜神樂あり

舊事紀  
 天孫降臨時大己貴神第二之子健御名方命  
 欲拒天孫於是經津主神遣岐神逐之健御名  
 乃命逃到信濃國諏訪郡迫甚而請曰願得此  
 郡以為父母之讓不為天神之怨而作吾居則  
 吾豈奉背天孫哉因茲經津主神以諏訪一郡  
 附于健御名乃命是即諏方明神也

神皇正統記  
 大物主神子健御名乃美神者事代主之弟也  
 今諏方明神是也一云神功皇后征三韓時天  
 照大神託以住吉明神諏方明神令為輔佐



諏方湖

下諏方

神宮寺

高鴻城

源方の湖

こまみ水

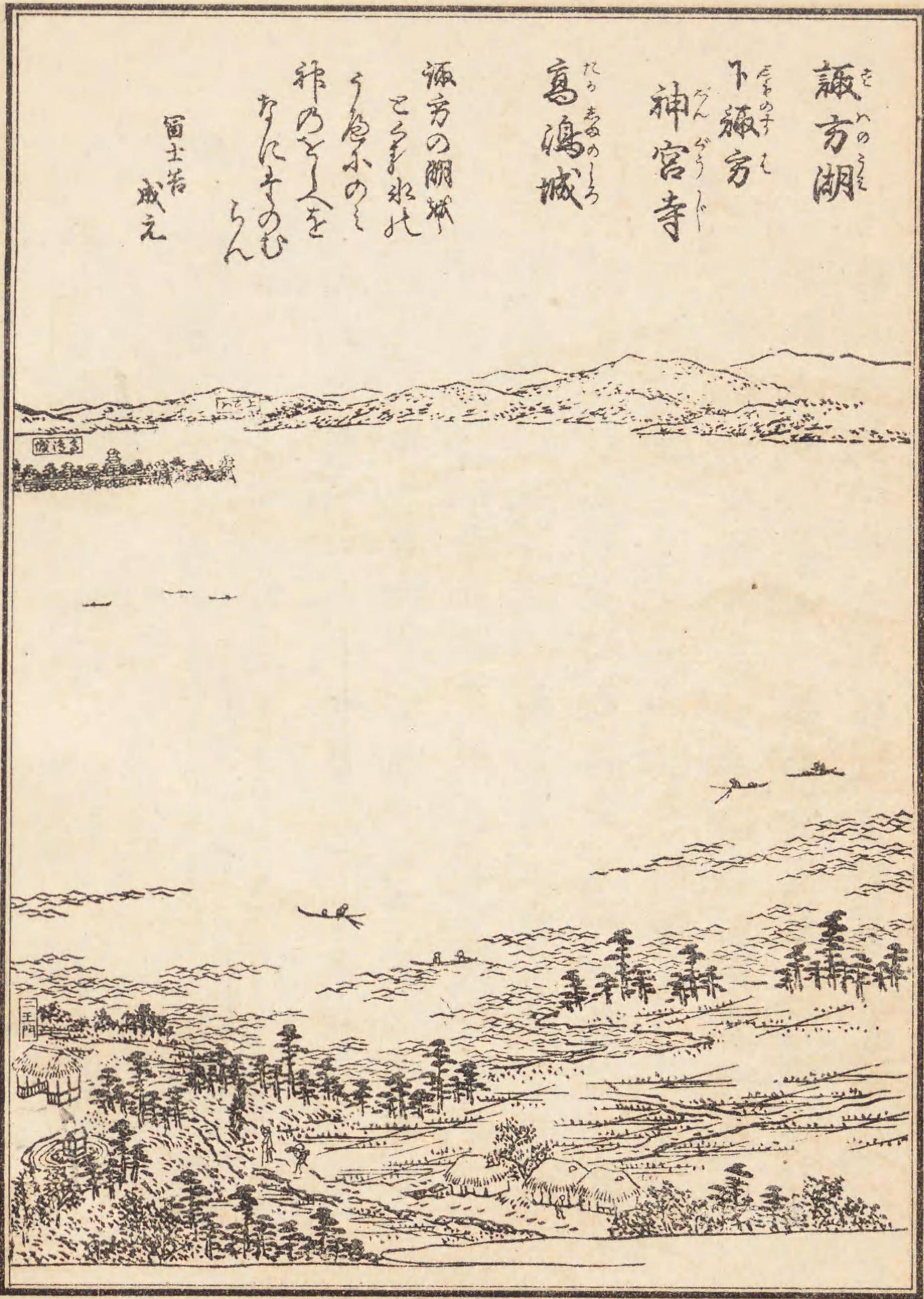
うきふの

津の

ちんすの

らん

富士若成元



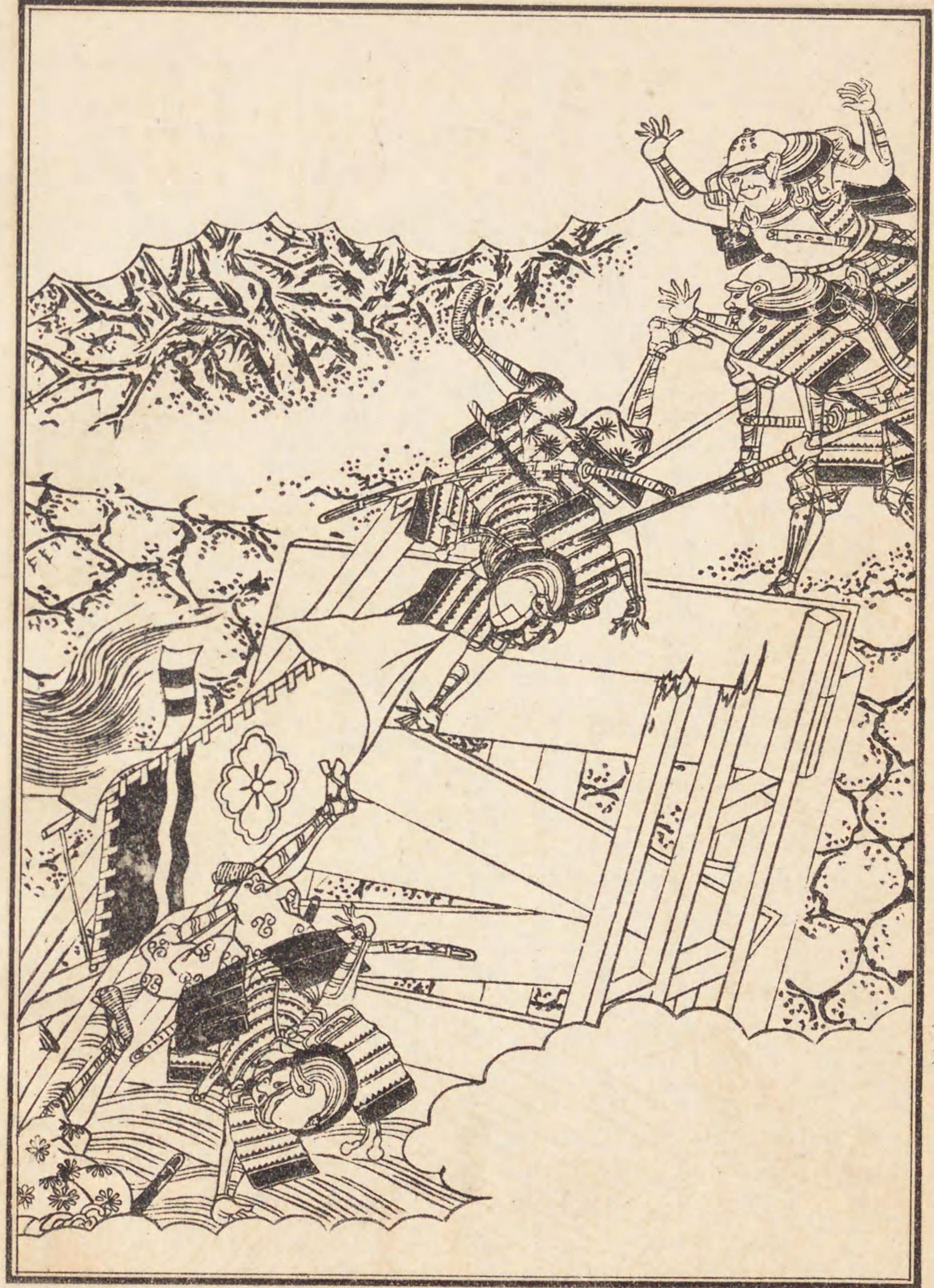
まんの海や  
水乃即りに  
乾りくさ  
せ井小  
雲井  
うの松  
八幡  
美濟











武因勝頼ハ  
 我勇威を  
 自負して  
 神佛とぞ敬  
 せんと遠  
 赴き清ひし時  
 忽ち板橋崩れ  
 名を奉り  
 あはれ酒方の神乃  
 此よりとぞ  
 神ト云ふ





氷の下に網を引き氷引せりて又奇異の業有り氷引せり長く  
 うづらて其所に網を入す其先瓜うら行乃早と持て此岸に  
 子向不より次のうづらたる所せもあみを送る處て幾所もわく乃  
 おくもうづらて網を引くくして魚を引ひりてわくればおく  
 くる幸と知りててを喜ぶ漁人おらるるをばいと又氷を引ら  
 漁人もも腰に長竿を挿じてあまあつて魚を引くも早ゆく  
 死とせぬるもせりて或は沈没の人あま番も家鶴を引く氷の上と  
 り小鶴がく石を引て屋を引く

高嶋

高嶋 下の所家よりモ里小あり 高嶋 同様に 氷及 馬嶋 二万石 味  
 繩を引く所あり有左右と 嶋の 方一がより入あり 其 岸よ  
 出入 舟由 舟を引 味と 山 幸 助 晴 幸 徳 張 ともより

衣裳

丈夫

衣裳 高嶋のうみと 舟とをみ たらふは 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と  
 すの海衣 舟とをみ たらふは 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と 舟と

大徳寺氏

諏訪

諏訪 一の所 天龍川の源 天龍川の源 天龍川の源 天龍川の源 天龍川の源  
 一の所 天龍川の源 天龍川の源 天龍川の源 天龍川の源 天龍川の源

富士

富士 山の眺を 山の眺を 山の眺を 山の眺を 山の眺を  
 山の眺を 山の眺を 山の眺を 山の眺を 山の眺を

蘇島

天龍川

天龍川 水の源 水の源 水の源 水の源 水の源  
 水の源 水の源 水の源 水の源 水の源

御射山

玉葉

御射山 射と矢の橋 射と矢の橋 射と矢の橋 射と矢の橋 射と矢の橋  
 射と矢の橋 射と矢の橋 射と矢の橋 射と矢の橋 射と矢の橋

金刺盛久



三ノ下  
下諏方  
秋宮



類題  
宮程  
若くは  
若くは  
若くは  
若くは  
道遠院





毎や一 文月廿六日神射山狩ふりて廿九日幸の狩ふ  
つを狩ふ長官五領家者のつを狩はつりてををて替  
つりて神祇後庭の神幸とて

保登地を神祇後庭の神幸とて又後摩那本木の白く神祇後庭の神幸とて

顯那云のつりての園今小縣郡塔田の保登の地名也

去雨抄 中今 建曆二年八月記云可禁斷鷹狩但於諏方

大明神御贄鷹者被免之云

去雨抄 中今 建曆二年八月記云可禁斷鷹狩但於諏方

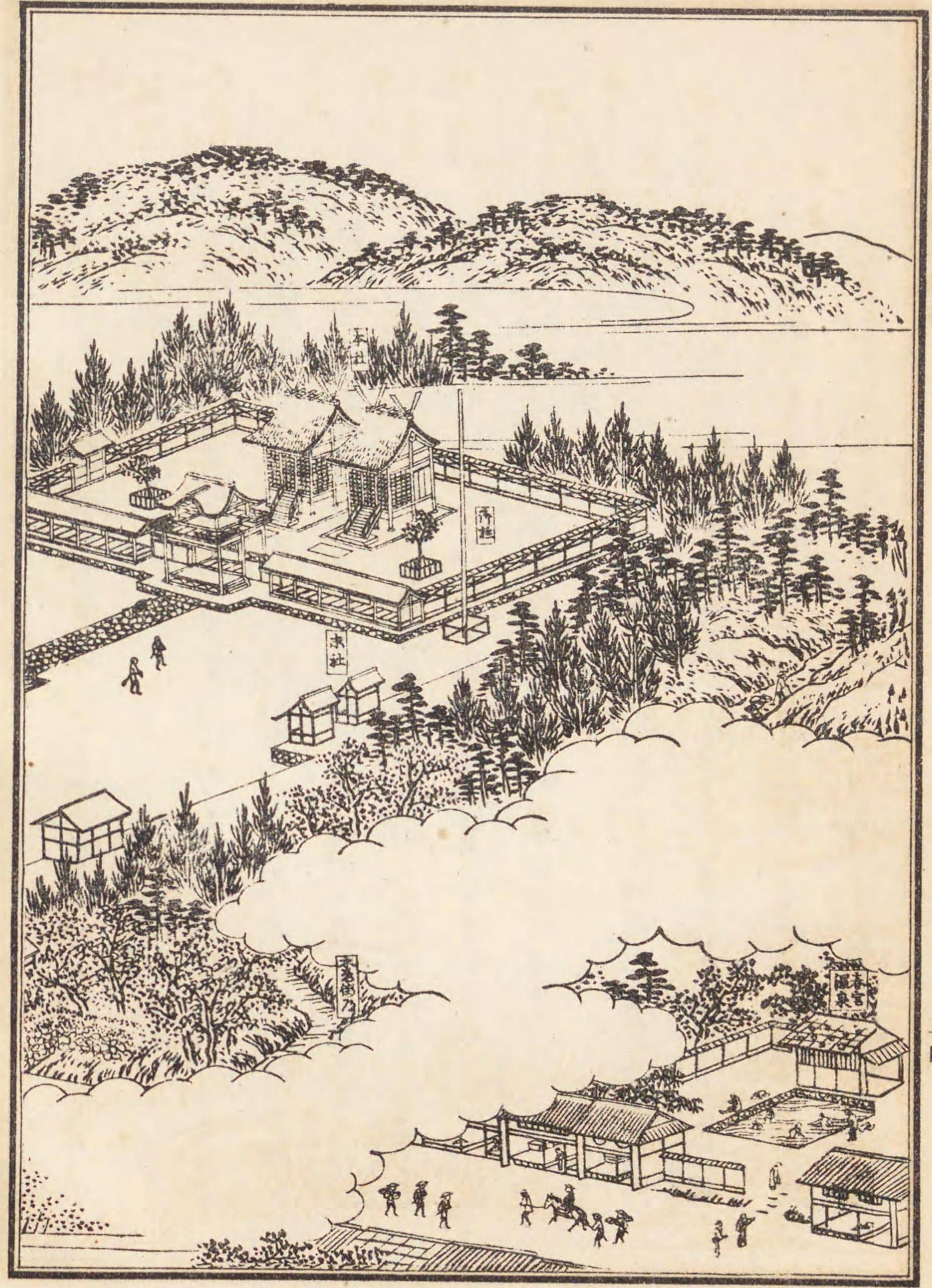
信太社百首 信太社百首の傳をうらなひし時精忠を重んずる人 宋良親王

風祝部

袋抄子 志はるる本意の櫻候はる風のはるすはあはひさ 深住模  
信太の園をさつらつと風早に所よりして源方明神の社小風乃  
経せりつものてきてつ社を春は始本流く物小長居く程く  
百日の間尊をさつらつと物ばに奉給く風移りて農業かん  
そめふよはあり母のばつらつとすははとある日まを見えし  
はるる風細くびくは後頼の秋此説ふあり

去程小法性院大僧正信玄去信天正元年四月十二日逝去師  
三年の間に深く此事以院密して今年天正二年四月十二日七佛  
幸と祝はるる所ありつりては方の畝園を此其は流くは心と  
離ふとる者多るをわ別して織田漢松の真家合神あり勝頼





千首  
 春宮  
 坂方  
 神宮  
 神宮の  
 山頂  
 如内日  
 春乃  
 世と  
 所



と攻滅する企及家なき武田の旧臣勝頼を誅め常以其備の意を  
 以て責てりるある武田の幕下三列山家三方の内北子の城  
 主奥平英純守貞能其子九郎信昌去侍八月とを遠列漢松河  
 隨以て日本長條城小指籠る勝頼は幸坂と小野とを以て  
 出馬のて長條城と城を以て守りて天正三年五月中旬甲辰  
 の辰と出馬せし我お従てりる武田道遠軒信連穴山左衛門左  
 入道梅雪一條右衛門左衛門信龍武田左馬助信豊武田兵庫御信重  
 真田源左衛門尉信綱を始て於合其勢一帯及び所人をも圍て  
 河内飯方大明神小系清ありて種より進軍せし下りて  
 かの松小馬坂向て種より進軍せし松小馬坂の東に於て小野信玄よりお傳  
 不飛甲の持陰梅植等の下り折るるを以て圍られ其より遠  
 へ逃給ひたる附板橋馬場と清波ありて小野信玄を圍ふあり  
 橋あり小中様より遠小野に於て舍人をけりて小人衆三人と死せり

津馬逸物との小勝頼馬上の達者也申す各所池とて遊遊と  
 ずりより津身小恙もせりてりる小野信玄の合戦ありてあはせ  
 雜人どもお私語するを理てりる武田三代記あり  
 和国大嶺 下の飯方城とて橋合橋ありて西谷とも飯方山とて小和国  
 義盛の城跡あり幸橋村立場ありて是より廿四所あり西條屋敷と稱せり  
 又廿四と稱て和国作ありてりる分給の事ありて空快的なる附とて富士山  
 見ゆる高坂路あり東坂屋敷とてりる三月の末まで雪ありてりる地所甚  
 多し此所之嶺より終に東條屋敷村ありて村見立場の事ありてりるを  
 上和国とて里六所ありて小中江名草ありて西側九輪草下毛虎尾草  
 釣鐘草は湯花とてりるありてりる茶花見もれ

旁より蹄馬をちりてりる和国作

上和信  
 濃和信

長久保中や武里之駅の駅に八幡の廟あり和国義盛の  
 靈塚ありてりる省の出はあは川橋あり和国が系とすはり



長窪の南小大門村あり街道より遠くあり下河内と云ふ  
 此の地は古くは村青原と云ふなり小孫殿の御領なり後河内小大門橋小  
 橋十間津あり南に流るる河内と云ふ地あり小大門橋より南に  
 大門津又大門村の南ありむす武田信玄の御領なり  
 小笠原長村と云ふ義清兩家の軍勢一萬二千餘人小大門津に押寄せ  
 武田家の軍勢も亦一萬餘人あり其時信玄小笠原長村に  
 十年を備え人をよめて物見を御付しは義二におはせしむりし  
 此の地は古くは小笠原村と云ふなり其地は古くは武田一萬餘人と相  
 見し然も後小備一萬餘人を軍とせしむり懸るに武田の御領なり  
 左河内津方の備をせしむり八ヶ岳の禁甲列通提が京に陣を捕りし  
 法勢の内足将隊將様田備中守日子忠義十年月利が更に加河内一乃  
 先小備と云ふ二の身が甘利と云ふり日多田津治嫡子利義と云ふり父の  
 板垣小加門と云ふ二の備の先子日多田津治の尉を領する武田加河内

三の先小備を虎昌後と云ふ堅む本陣の備と士人將原加賀守昌後  
 右備と原英流守虎流小備山守虎盛左陣に市川奉女正三子三子  
 原と左備の月と右備の備と武者奉加藤駿河守昌頼多田治平  
 在河内市川入道梅印あり御の處本信及勢大門津に打越り村と云ふ  
 先手布下平治入道知十軒其外宗徒の者は何れも奇正の列と云ふ  
 懸合の法と相計り知十軒の備は進光様田備中守日子先小押  
 の数兩陣岡を令く砲弓は迫合と始り終の穂先を拵へて互に場を  
 せよと云ふ平治入道と云ふ別者なり其れは自餘は進光と士率と云  
 知一真定小突ては河内列勢平治入道が働小うけられ一所件引  
 退くは種を安らぐに思ひて二の先其利押あり勝りしに信列  
 勢と云ふる三子三子知十軒がけしは味の方へ引寄せ武田進光と  
 備は乱れ引退くは小笠原長村の先手勝勢と云ふ河内津治守中  
 け合をく入札進光のく小笠原勢一隊本陣に引寄せ大勢討つ

木曾路名所圖會







信列一方の先鋒兩度共小うら負へば大將義信大に怒り我旗幸  
 としつて勝敗を二戦中せんとせしむるに押寄ふ安間が勢信は  
 兩方互小給入ると必死と戦う信列勢は多勢とて大將義信  
 一戦中と突あふを懸ひつて進む安間が勢敵ひまけく  
 四谷路に散れくす所引退く二の身も備へ飯家兵士率以  
 勇て村上勢本突のれ大將小笠原右馬助長時未牌を取て其  
 が勢本馳合を退つて内散り其附旗本の原加守備る原加守  
 昌後様捨不突合んや妻子の方へ備を押しつれ大將時信自  
 未牌を多く旗本とつて左の方へ押寄ふ原加守守備と左右  
 より敵隊中にて様本とつて突入く巴の字本とつ井の字本とつ  
 突散りしよの信列勢時信昌後兩備の様捨小散走して其川中  
 流れく散れを先手の二備を丸く退散と限る小印と揚げ其首と  
 彩衣に帳面一千七百廿二級より味方合隊隊は者疵を帯びる者

長窪

石荒坂 上の傍方七里は同坂道より  
 石刻坂 上の傍方七里は同坂道より

蘆田

難兵合々く二百は三人かり専ら地蔵を考られり軍記あり  
 蘆田まで一里半は驛の民居三戸ありを有お對しと巷と  
 方に其餘わう小散在り  
 全月まで一里八町芦田何某が城跡ありは駒小服菜と賣  
 海野平と信玄と謙信とは所ゆと合戦あり又根津村は根津

海野平合戦

十月十九日海野平に戦ふとて則ちの地中押出さる時信止中  
 時幸小幡虎盛原虎胤は三人を居れ景虎若大將とても項羽  
 城も欺く勇將とてを義清頼朝とて今日の合戦と必死十九一  
 生てつるに時大軍は軍之海野三人物見たりと能見候事下  
 中野より二人則ち向ひて敵の橋俵を下垂し張海へ小幸助助が申



乃の敵の備速ある申小備よりその中合戦を持ち持た始と  
 尚家との取合形は甚備の地法厳重とせし原小備が中々  
 敵成程合戦を持ち備蓄と相見の人数六千の内外とせし  
 斯く二人又誰先も其を先手とせし申小備は其の  
 外中何れも其の先手とせし申小備は其の  
 備の立括を悉く演習して其の先手とせし申小備は其の  
 勝勢今日午刻まで鬼角とて時刻を極し其の先手の吉刻より  
 着た別隊の大將其味方勝とせし其の先手の吉刻より  
 敵と其味方弱と味方六の勝利と其味方七は其の先手の  
 中より其味方弱と味方六の勝利と其味方七は其の先手の  
 右の方へ小山田備中守信列先方の相本市善尉屋月甚八芦田  
 下野多友此平尾老尾耳取後路平原左と郡内的小山田左善尉  
 信長先方の長左衛門尉小若甚八尾五郎左衛門和田福次内

















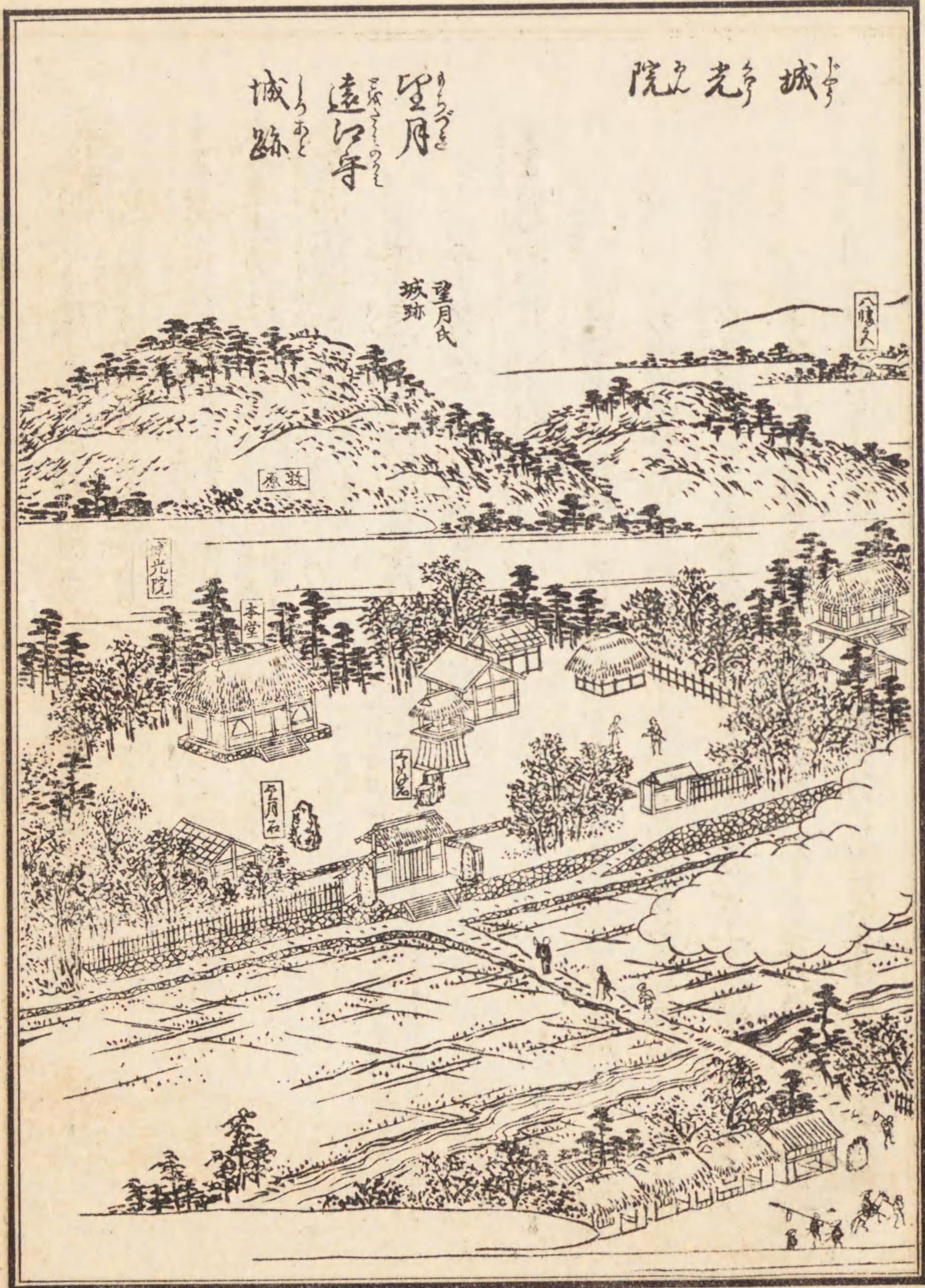






城光院

望月 遠江守 城跡





望月

八幡中々二格或所あねりり吾光寺二十五里

望月城跡 望月の北山の上あり

大伴神社 今津藏社と稱はけし生か社と云

望月山城光院 日取あり

奉尊阿弥陀三尊佛 開基望月遠江守信名滅光院殿東山

望月石門内丹 登石あり

望月御牧 今牧乃列あり

拾遺 逢坂の關北流石は是にてつりや幸とん望月の駒 紀世之

後拾 ありは板のむき引程の押つらにありしは是の駒 良選法師

金京 東海濱と云ふ望月の駒ありしは是の駒 源仲心

新古 されは是の古道約ありて又是の駒ありしは是の駒 定家

新千 ありしは是の駒ありしは是の駒 光山院

後拾

拾遺

後拾遺

年次なき雲の上と見しは是の駒ありしは是の駒 後漢院

望月の駒ありしは是の駒ありしは是の駒 津和野

望月の駒ありしは是の駒ありしは是の駒 京極院

望月の駒ありしは是の駒ありしは是の駒 信濃の

望月の駒ありしは是の駒ありしは是の駒 貞馬を敵覽し

望月の駒ありしは是の駒ありしは是の駒 月廿九日

望月の駒ありしは是の駒ありしは是の駒 望月の駒ありしは是の駒

望月の駒ありしは是の駒ありしは是の駒 望月の駒ありしは是の駒

望月の駒ありしは是の駒ありしは是の駒 望月の駒ありしは是の駒

延喜馬寮式牧 信濃國

山鹿牧 諏方郡 塩原牧 日 岡屋牧 日 宮處牧 日

殖原牧 筑前郡 大野牧 伊奈郡 平井互牧 筑前郡 笠原牧 伊奈郡

高位牧 高井郡 新治牧 佐久郡 大室牧 高井郡 猪鹿牧 佐久郡







川中港

山本勘助記

川中港は、八幡より十里許りあり、昔は、  
 必死に戦場なりとあり、  
 上杉入道謙信、川中港に合戦、小幡將時、武田とて、武田の兵を  
 争ふより、川中港に勝負せんとせし、  
 備置れど、十分すゝみ、  
 持時が備へ、  
 旗本、  
 軍の勢固く、  
 陣をうけ、  
 田方、  
 信玄の旗本、  
 手は、  
 入る、  
 互向、

謀る、  
 敵、  
 一、  
 去、  
 形、  
 其、  
 切、  
 刀、  
 以、







坊どかん幸奇傳之せつろは持て我を山本助時幸入道なり也  
 名宗多小治信叔と無双の曲者源運河と老一遠信去小出合形  
 け傳運人を強念よりせられし續く時方を早より一ふあて  
 空しく討死も幸益かり一旦運死味方の兵と走りあると是様一  
 中本派つう捨て馬返されざるを助助入道字中に入つる時將りくか  
 迹をさせ死せんとく小退りけし信信の系馬と放生月毛と号せ  
 内量愛の強足なれいさつめと号向幸あつ騎人も名譽の連考成  
 左助助入道と名種しせしども運幸派は信信とて小味方の  
 陣中小切け入んとせし種多派山本道鬼けりふんと思へば幸念  
 なりや頻小馬をちり馳けり其間立るをうろとぬんせく信小持  
 たり強を投打する小種をくして移しひさうて信信の幸なる馬の尻  
 曲小突あつらうにせし物なるを強備あがり形くも獅子は中走  
 を信りくく大小種とて原川の石橋筋ふりけり其早紀幸烈風の

おくくされ終小形方城人共ひる道鬼齒がみを形一敬軍を  
 白船んがまきりけれ 熱功記あり  
 八橋の駅を過り今世継村下原村みまきせのまは瓜瓜とくらふ川  
 舟のりけり舟人の経違ぬる心河を渡り見たりううは小見はる見  
 きりやとやと人まきりやとむせり今とありは船身老る  
 今とむりやと人まきりは我んり古今と隔りふり我の船の中  
 されはるやとあつらふの意ありは所を過れば昨日又いふは  
 所ありて今とまきのふり人渡り過りぬるの来月とまきりる意  
 うけりぬあつと思つたたりり小治信のふり小治信とぬ  
 岩村田まで一里半程月三所許お射して巻とらん舟を  
 散在れ入小治信神あり是れ入事ありと此あり  
 駒形明神社 駒形神の屋敷あり  
 園云ひりけり牧馬場神とて中なる法間山の麓なる石作やといふ





この川の里ありては氏何某と云者之縁の年以約のれあるに云ふ  
 見し幸ひと歎くを水舟乃其の石畑より地より駒のれはなる  
 石畑より地畑より云々を感して年々花月の中北七日と云  
 する其石のれ

佐久郡相本村  
 新田



高サ二尺四寸許

後の方長く基不れなり石と眞石駒も同色  
 駒の石の内と三分程なり

今も社を建て駒形明神と崇地なる  
 け駒は色く下原上原と街道より山あり新田  
 と城く平塚原村より

相生松 平塚村あり

岩村田

小田井中一里七町 駅内の町立六町あり相対  
 巷は其の好散在に若光寺へ別道あり又小幡  
 道二里あり又甲列地乃道傍あり尚駒を内藤英彦  
 の領地と云人なり

小田井

佐古祠 小田井中一里七町ありこれより  
 かのいふ原 芝田 駒形 此流あり右小幡村の社有  
 道合中一里十町 駅内 武町よりまき 豊後  
 旅舎あり宿懸一東の出に本業降堂あり道は此  
 家あり

け驛乃中井海ありて流傳し用水よりらるこれと云くあり  
 ありてなり飯盛の嶽ハツが嶽見ある二四月の流す  
 本田系大久保橋は流して道なるなり坂道なるなり







浅間嶽



妙のひり  
 池ねき  
 浅る中戸  
 ちねき  
 ちの標  
 ちの標  
 浅る中戸  
 池ねき  
 妙のひり













過分皆掛野井沢の二駅を渡りて其麓より山麓まで  
 一里中より皆掛野井沢を六分半迄あり  
 塩沢は此より御湯の池あり樹石あり  
 電石は此よりあり

皆掛むらびはまきと岩沢村あり坂あり左右皆あり  
 坂道は右左みね原あり



坂中まで式里八町野井三町より左右を對して巷とあり  
 其原と山間小敷を渡りて遠近里より小敷原あり  
 野井沢は此よりあり

信濃本宿の山登りて甲斐飛騨も地形も  
 信濃より修へ坂本を去るの山を雪原として寒く北國を  
 雲原とて地の修へ坂本を去るの山を雪原として寒く北國を  
 追ふれ二宿を渡りて山を越えしり高しは三宿の間南に  
 里より東に式里が程あり山を越えしり高しは三宿の間南に  
 り敷生谷に只禪蕎麦の山あり又菓の樹もあり民家あり植

本形

碓日嶺 野井沢より北二町あり坂の上より民家あり碓日嶺  
 宇須比坂野井沢あり白井東麓吹嶺あり  
 名義一説本日幸武を此地に踏踏し終りて又け尊東に  
 乃ち碓日嶺より夜已の方山越へ橋を渡りて二宿の間  
 吾孺者耶く中宿より山を越えしり高しは三宿の間南に  
 乃ち碓日嶺より夜已の方山越へ橋を渡りて二宿の間  
 乃ち碓日嶺より夜已の方山越へ橋を渡りて二宿の間







あより坂東に八ヶ嶽なる東海道の尾根山嶺根山のやうな山あり  
見よ六ヶ嶽下終常陸上りての山をゆふ嶺波山日光と特小  
高見見く入り

太平記苗吹合戦云

新田武義守義宗と足利將軍の所運小退後して石原の合戦も幸を  
達せしり六ヶ嶽園と名あり一畝は信濃を後々高き苗吹津津  
とて地味りたる山に於てありて其の山苗吹津と名し上野親王を大將と  
捕生津と名し合其勢二萬餘騎先朝第二の又上野親王を大將と  
て苗吹津小打物れ將軍小寺義宗の合戦も幸あり石原の合戦  
より一歩もなれど馳奔する人々も其の千乗の少くも利友も大將と  
合其勢八万餘騎將軍の所運も馳奔する薩倉も其の義興義隆七萬餘  
騎も其の勢と付るとはく六ヶ嶽の山新田武義宗と上野親王と捕一  
万餘騎とて相つとて相つとて相つとて相つとて相つとて相つとて  
よ大勢も打勝るるやと此の勢も相つとて相つとて相つとて相つと

定く將軍二月廿五日石原の合戦も幸あり此府も若狭に甲斐  
源氏武田隆興も月刑と名し捕生津津也武田上野親王も甲斐前  
司公始とて合其勢八万餘騎と馳奔する人々も其の千乗の少くも  
よとく合其の陣を見たりと小寺義宗も其の千乗の少くも利友も  
取て峯も其の陣を見たりと小寺義宗も其の千乗の少くも利友も  
の役なりと旗も其の勢も其の千乗の少くも利友も其の千乗の少くも  
とて甲斐源氏も其の千乗の少くも利友も其の千乗の少くも利友も  
其の千乗の少くも利友も其の千乗の少くも利友も其の千乗の少くも  
逸見入道下末虎の甲斐源氏も其の千乗の少くも利友も其の千乗の少くも  
千乗分字源宮小山作竹も其の千乗の少くも利友も其の千乗の少くも  
陣八陣と名し入るるに其の千乗の少くも利友も其の千乗の少くも  
其の千乗の少くも利友も其の千乗の少くも利友も其の千乗の少くも  
其の千乗の少くも利友も其の千乗の少くも利友も其の千乗の少くも  
其の千乗の少くも利友も其の千乗の少くも利友も其の千乗の少くも



たけふの藩一て分り交小勢とつて大敵小敵小を鳥雲の陣中とて  
 鳥雲の陣中とて先づ小山とありて左を水谷陣とて敵と平野小見  
 相争ひ我勢の程を敵に見せたりて虎責狼牽ひつて討てた進で  
 敵之は陣幸小鳥雲小南とつて敵と利貫とつてと武蔵守  
 若吉若とつてと武蔵守とつてと武蔵守とつてと武蔵守とつてと武蔵守  
 千夜とつてと武蔵守とつてと武蔵守とつてと武蔵守とつてと武蔵守  
 ちよひて苗吹峠へぞ引上りたる。下妻妻一きよ  
 武田大膳を交情信を獲てつて引籠りつてつて引籠りつてつて引籠り  
 板垣駿河守が大将とつて兼平左衛門尉を日向大和守小山田左  
 兵衛尉小宮山丹後守昌友遠見勝沼小曾南都小信州生野田  
 下野守相本市善尉を指別れ其勢都合七子孫人十月間小甲  
 府を多く採り採り押留小月とつて六月の巳卯小山室通の追を河  
 野井法をお越とつて苗吹峠を越つてつてつてつてつてつてつてつて  
 苗吹峠とつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて

日本武尊の御日旗  
 より辰巳の方旗なり  
 楯形をくゆる若狭く  
 とつてよれ若人の神と  
 金人の下く後世まで  
 秘しける









切所もて公の使すも返りもあらず見奉る事なれど相らざるもの如  
 迷本勝負へておさねおさねも殿の土産にはあらずして厚塗捲く  
 けり合ふ公濟りや所も互に塗成り合せく響く響く見らぬ如  
 二科力足と踏く鉄壁も碑もく実務も真人の内用と実も馬  
 運よそあらずる肥前も右のく貴公も平なり二途二途も相  
 奉勅て別首松捲り松井田三行をえさくは好む信くは真の振  
 森か是非小返りて討死をせよと究竟の者と馬も連り備と唐  
 仍小返り切所を城せ二母三本返討人へは公衆衆日向相本若田法  
 始くて朋勢と内と突る中も上船も及古白倉赤赤赤首と  
 ころ已も子負引返り上校勢散りに討負と作を城と敷とと退居  
 かく討死経小款の首公は半一千貳百十九級武器もよめく小返りて  
 之本勝其日の午刻よりりて大將後河内信形勝岡の法武を城にせ  
 其身本凡本腰をうけて軍政と奉り甘分駐るさかきと自將のゆきて





天晴美く一帯をくまの守り  
 熊野権現社 熊野の権現社の所あり本社三尊本社多し一帯を御殿神樂  
 信濃上野國塚 塚あり  
 刻石坂十八所 坂あり

狂井流をきりてその板橋のつらげ所あり  
 一盞の酒を醸して道不測を流のてし形に  
 刻石坂を中を覗の事  
 刻石坂十八所あり

上野 坂幸

横川

上野 松井田

路はこれをはりて坂本の駅あり

松井田まで二里半南駅五所許民家相對して巷を以て

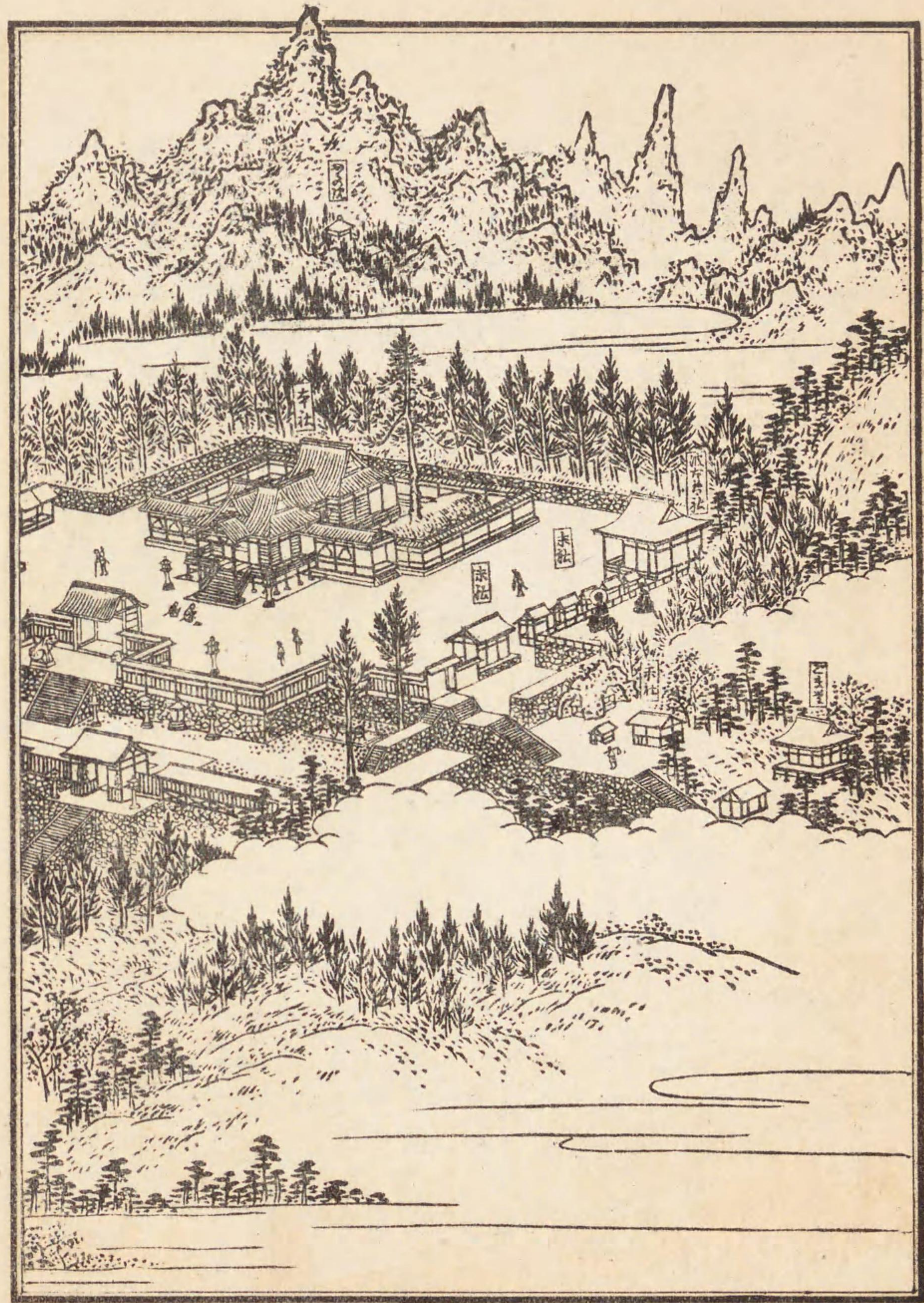
百合若足跡石小山の道の側あり

射拔 穴あり

安中まで一里三十所は坂を松枝とて

八幡文の角一海宿あり







妙義  
惣門



白雲山高顯院 俗小妙義山と号し松井田より入ふ又横川

奉社妙義大権現 社殿瓦葺く  
波古曾神社 当地主神

天神宮 太神宮 末社 八岐宮  
神樂殿 繪馬舎 護摩堂 金毘羅 山王 山神 北三夜

辨財天社 飯綱宮 親世音 欽喜天  
飯綱不動 巖窟 大荒神 中門 兩脇あり

廻廊 巫女列と系指人お神託を  
御湯釜 三ツ 隨身門 左右に随願立 石階 百六十五段

鳥居 額白雲山 辨財天社 稻荷社 大黒天 人丸社  
飛騨神 藥師堂 石階 二十八段 奉坊 乃右 橋 深川

石階 九段 神馬舎 下段の 惣門 類高顯院 二王坂安ん

子持山と波古曾神社姓古より此地主神より延在帝の







高寄中一里三十所は狹民居三戸可なり相野にて

貫赤神社 延喜式内名神 八幡宮の八幡村ありひり八幡を御新祭典の安倍貞任御任候

本社中央應神天皇 東神功皇后 西仲哀天皇 筑紫あり

神樂殿中門共神あり 惣門二天と末社山王 其外あり

本地堂 若宮八幡宮 上豊岡あり八幡を御腰掛石の御燈より例祭三月十八日

鳥川 八幡宮を置く八幡むら 若原村の法圓権現の宮あり豊忌村を

松鼻

其條を散在に

八幡宮の八幡村ありひり八幡を御新祭典の安倍貞任御任候

本社中央應神天皇 東神功皇后 西仲哀天皇 筑紫あり

神樂殿中門共神あり 惣門二天と末社山王 其外あり

本地堂 若宮八幡宮 上豊岡あり八幡を御腰掛石の御燈より例祭三月十八日

鳥川 八幡宮を置く八幡むら 若原村の法圓権現の宮あり豊忌村を



うらね  
神小  
ひり  
ふり  
佐世  
若乃  
久れ  
に戸  
版盛



高崎野

高崎野中の一里十九町は所と松平右京亮居城の地と  
城中の所長一凡二十町をうり繁昌の地とけ國都會を  
あて月毎小六夜の市あり第一舟上列宿船樓等自目行とて  
馬の鞍舟用其外種々の物販物とて交易を賑ひいそいそあり

佐野舟橋香蹟

佐野舟橋香蹟 佐野舟橋ありりし馬川を船橋ありりし  
船本の報され石佛あり  
舟の岸と舟橋あり

万葉

東路の佐野舟橋ありりし舟橋ありりし舟橋ありりし

河表

夕雲小川の舟橋ありりし舟橋ありりし舟橋ありりし

今系

とみ野川の舟橋ありりし舟橋ありりし舟橋ありりし

後古

又月夜舟水の舟橋ありりし舟橋ありりし舟橋ありりし

新後拾

道まに佐野舟橋ありりし舟橋ありりし舟橋ありりし

左大舟

後雅母

源仲綱

松盛法師

後系佐実

後系佐実

夫本

燈臺門里代とをめ小のてと程をり佐野の舟橋 為家

定家卿宮

例系九月十五日

佐野源左衛門恒世蹟

石造の中あり

佐野恒世

幸世の人は小勝矣一特小津本の謡曲は年久しを

名

名をり一寂明寺殿諸國行脚の幸室を録め六具を以て其後の

後

後りて謡曲若菜も足てりは旧約も後人擬へゆると足てり

佐野長者屋敷

佐野長者屋敷 佐野長者の御所ありりし舟橋ありりし

新所

新所中を一里半は款六七町をりりして民衆相對しり

倉加野

倉加野中の一里十九町は所と松平右京亮居城の地と  
城中の所長一凡二十町をうり繁昌の地とけ國都會を  
あて月毎小六夜の市あり第一舟上列宿船樓等自目行とて  
馬の鞍舟用其外種々の物販物とて交易を賑ひいそいそあり





佐野  
舟橋  
右





園小素於裁家宅多々益書をいゝのみ嗣をさわかれ者て  
 絲瓜線功を積む術不織家唐の玄宗と宮中にも益書を著しめ  
 嬪として女工の幸以知じむ我朝もを應神帝此清代も兵服織  
 好の二女ありてお侍を教く宮中にもいゝあを給ひし幸あり  
 上刑勝頼未慮攻

勝頼其日の夜東出の爲夜くら言代の腹巻は後の羽織をせられ  
 白無織の毛並をせよとせしん物も小土屋忠義を勇卒服又市房  
 一宮左ま主人の夫面も之寒と通付故と本後も結退の返しつ突  
 合々まの棟をたひの物ひ煙と海中に網中引退くと通うとせ退落付  
 八家に早城戸を立合をく并取の内も引退る服又市房も入んぐ  
 故六人を相もたし獅子奮迅の怒をあり四方に面を預前小一宮  
 左ま更湯陣門を押破りたまま又市房も又市房をうけひく  
 誇り七突合るるたまま又市房も又市房も又市房も又市房も  
 け場孤見捨く引退れお家も成をたれお供死せしやせしとせし  
 け

られく公將ころや取く返す所は清見中根石黒城も張幕と各  
 力と放せ給服も忠信城も小土屋忠義を一字に城門小糸込の者共  
 勝頼小搦と二の門の内も直や糸入去を忠義一巻をた名を  
 乃れも原隼人佐土屋小先を越られりや押壊く棄込は所が故二  
 人と渡合せ張めぐる天晴ゆしとせ見くつりる駿河先方の目尾  
 此左進も糸入られりも又市が働給く小教しと目尾陣と其場小  
 本はたのりたれぬ熱軍一役も糸込るふより城を失ひ一人も  
 續らば本丸も引はし附味方も息が休先幸丸も糸入んと我孫  
 たりる勝頼も糸入るるも又市安房守も糸込るるも又市安房丸も  
 水の手廓れありる人々をたれぬ氣と付は唯堅固ある幸丸と糸  
 破んや勇進む又市安房守もこれ孤考へ幸丸の應援拔んと煙ひ  
 寄く水の手孤をくや攻められぬ城兵大目張頼して方使を失ふ  
 てせしんくみらるるけりき武田勝頼軍記と



**新町** 上  
 幸庄中二里寄駅六七町なり  
 氏家相對して巷を打ん  
 金鑽明神祠 例祭九月廿九日  
 祭神 素盞烏尊 奉社の左右内外社 稻荷 杖粟  
 其外末社多し 幸地堂 石動 石動 石動 石動 石動 石動  
 大の神と書けり

**上野** 武  
 武花園場あり

け取坂より川をりりかたを看かす厚むく石神より  
 左の方赤木山見ゆ家及士峯山似たりけ新立場之晩念寺  
 村なるく小橋村よりけ新より母とこの道あり左の森の中に  
 あつちと金鑽の所あり  
 保谷まで二里廿九丁け取民居三町けり相對し  
 巷のちん祇園の神本あり六月廿七日祭あり  
 南歌を色く傳承堂村より上列武列國界の標多公達家敷不存と

普濟寺  
 忠澄  
 古跡





以て大市あり人較多群集して交易城あり幸多し  
 其れより西田むら山川幸多の橋あり園の郷と名給六孫  
 をがけし急流あり

岡部原 岡部村あり  
 岡部忠澄古跡 今も門給振伴も殿の陣屋あり  
 普濟寺 岡部朝禪あり

本尊釋迦三尊佛 忠澄墳 堂あり又封塚の本  
 當寺あり 岡部六孫を忠澄に御城領地との禪所  
 道徳を感し殿閣公造より幸多其十一面觀音あり小一百  
 軒の觀音と雕刻して安んん折忠澄之皇世二代教達天皇の後  
 亂なり初と惡源義平其屬一平治元年十二月廿八日平重盛  
 と待賢門より觀ひ大木武勇と振ひ壽永三年二月七日擧列  
 一合戦小平忠澄を討く首級を得し故其勲功の美しと七

蓮生法師を  
 佛門に入  
 けり其れを  
 方へ是も向  
 東へ下ふも  
 尻馬に坐り  
 けり是れを  
 易の道  
 時人の中





忠度の米地五色と忠澄本郷小忠澄武列秩父郡我井村小岩嶺を  
 穿ちて石室公堂と自像松を登り彫外其傍小深院と建ち  
 忠澄菴と號を又武列榛沢郡岡部小住して岡部を名す  
 墳墓公堂に忠澄靈神と作る其外良徒の古墳数  
 あり宗祇法陣行御のといは塚よりして標志の如き塚あり

**深谷**

深谷中と武里二十町は深谷六十七町併民衆相對し  
 菴深谷に餘り左右に散在

**觀音堂**

深谷よりあり一本の柳ありと云  
 兼園坊の碑あり其銘本日

我佛法入る風程深谷より宗風終ふ  
 中と修徳と佛法をこしれ  
 此の幸深谷のくぬぬ月やうのえん  
 こねは見え  
 此とちやくや柳を骨と形をみたり  
 兼園坊  
 祖風

け深谷のゆけ六丈本の松むさう道の幅も廣うて勢のけり  
 江戸本通を志我東方む新郡村と立場もて葉あり高  
 柳をこく後松新島村あり榎木むか居る市原むさ  
 よう深谷の深谷

**熊谷**

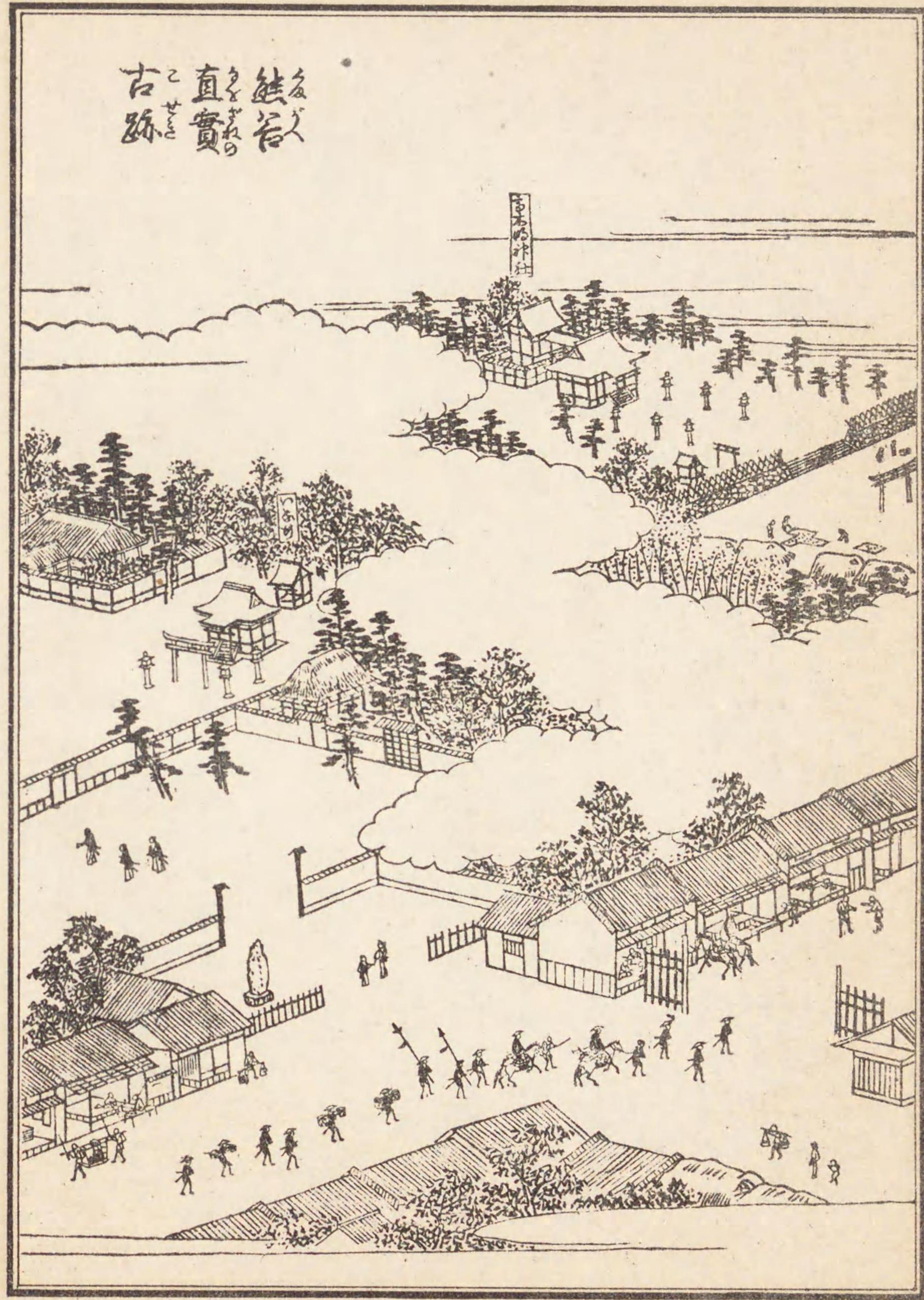
鳩巢中と四里八町は深谷三町所民衆相對して菴とあり  
 左右も町あり至つて深谷に所とあり秩父山と三里  
 は蘇我島とあり島と重忠の旧趾の城のや江戸を島と  
 十六里深谷より幸多二里半南の方打を永井八の二里中  
 ありこれと蘇我別當実盛とあり所とありを里守ありは宿

蓮生山熊谷寺 熊谷の宿中にある寺  
 奉尊阿彌陀如來 徳公福徳の徳多田満仲の息長文九  
 法持 持志佛の坂東阿彌陀佛の其一なり蓮生





新 然谷寺  
直實  
古跡





蓮生法師本像 安に 日墓 新設の無の形刺の形にあり  
 抑建管治布直實と桓武天皇の俊風平盛方の子と若冠乃  
 と此開東に教と之下直光の聲とある成長も居ひ武勇つら  
 うて都待賢門の合致も懸係も我平に属し十六騎武者も  
 随一と名も石橋山の合致も外本居れの恩賞とて右大将頼朝公も  
 若小橋の役付る幕と幕外と其介勲功の威状世一通中々賜る  
 其後嘉永三年 甲辰二月七日按例一告乃合致も中々友支又敷盛と  
 討と首と賜る吾子直家と戦場も足共ひ一討の想と云ふ教盛  
 心の父母此形とひ吾子と為のけつあをささり且其其其を居ひ  
 其身弓馬の疾も守れ後生の思とも思ひ居り居り後念の心も居り  
 その後建久三年の冬久下指も直光と鎌倉も終る武後園久下  
 終首の境此形論の後通ふ誓瓜拂ひ豆列走湯心も又翌年終不  
 登りは然上への所骨子とあり二公も合佛の行者と成小寺長及





權徳元久二年秋郷へ厚く祀り上之由願とされ六自画四樓の  
 曼陀羅希小神自他の御新秋賜るに蓮生を後史武列へ下り  
 附不肯西方の行者とて仮初日を西坂後本せり乃れ馬車を運よ  
 亦くは瓜妻せり乃れ蓮生法作の分り

淳古少之別の著る石沙信らんあむひて後とせりは

建永二年九月四日午刻に生きたき佛勅秋給るや村里のは小乳と  
 之をたふ果して其日よ西人ぞ宗よ喜樂聞く異音著下て眼と  
 方かく性生し畢れ種瓜種人として遠近の老若寄侍ひく箱  
 麻のてし紫雲の多庵の上よ止居幸一時修り乃て西坂とてきぬ  
 こんし不往生の靈瑞く後世又正奉中情隨意上人中真岡起有  
 今の慈若寺ことあり

禎守弥三左衛門稻荷八神伴弘法大師此作より直寧不斷位尊あを  
 て猛敵秋討魔け陣頭小たり一付慈若三左衛門と名をて速実小

力と流致い小勝利とけり特小一舌の合致も大手の先陣本向ひ徳と  
 初りたるひに彼人付徳ひ和勢たを志け我後り孔不思後さ小其姓名  
 以向公帯に海を信むる所の振若ぬ神と名難と救んあ無若味言ふ  
 や現下るこそ忽其あを隠しゆ小即若味に宮舎を営く神と  
 崇光今尚山も法守しも是

尚山什寶

放光名號 和秋名號

芥替名號

弥陀三尊 真筆

直實阿持母衣襪名號 日真筆

理書 日真筆

阿弥陀佛 蓮生法作他  
僧上寺學書文信正筆附

裸形弥陀 傳本

迎接曼荼羅 蓮生所持  
内は弥陀三尊書  
 圓光大作真筆

慈若弥三左衛門稻荷 神伴弘法大師他  
辛比十一面六臂

蓮生所持笈 蓮生筆

念珠 鐵弁 証 以上  
蓮生持物

十五遍名號 蓮生筆

逐馬画 狩野信信筆  
贊太納言實維卿筆

壽牌 火防名號

不斷光佛名號 各  
幅隨意上人筆



氷川神社  
ひまのくわい  
むすのくわい  
武蔵國一宮





御製

法數

潘禮意上人所持

子孫に置状

蓮生自筆

平經盛卿返状

訓閱集拔書

蓮生所持

蓮氣考并旗竿等寸法

幕

石橋山の勲功

騎鞍

蓮生所持

熊谷直實居城

戸田八所村より東行寺より一里寺あり云

東鑑云

治承六年六月五日甲辰熊谷二郎直實者匪

廂朝夕恪勤之忠去治承四年追討佐竹冠者

之時殊施勲功依令感其武勇給武藏國舊領

等停止直光之押領可領掌之由被仰下而直

實此間在國今日令參上賜件下文云

下武藏國大里郡熊谷次郎平直實所定補

所領事

右件所且先祖相傳也而久下權守直光押領

事停止以直實為地頭之職成畢其故何者佐

又云

汰毛四郎常陸國奥郡花園山楯篁自鎌倉令  
責御時其日御合戰直實勝萬人前懸一陣懸  
壞一人當千顯高名其勸賞件熊谷郷之地頭  
職成畢子々孫々永代不可有他妨故下百姓  
等沮承知敢不可違失

治承六年五月卅日

久下

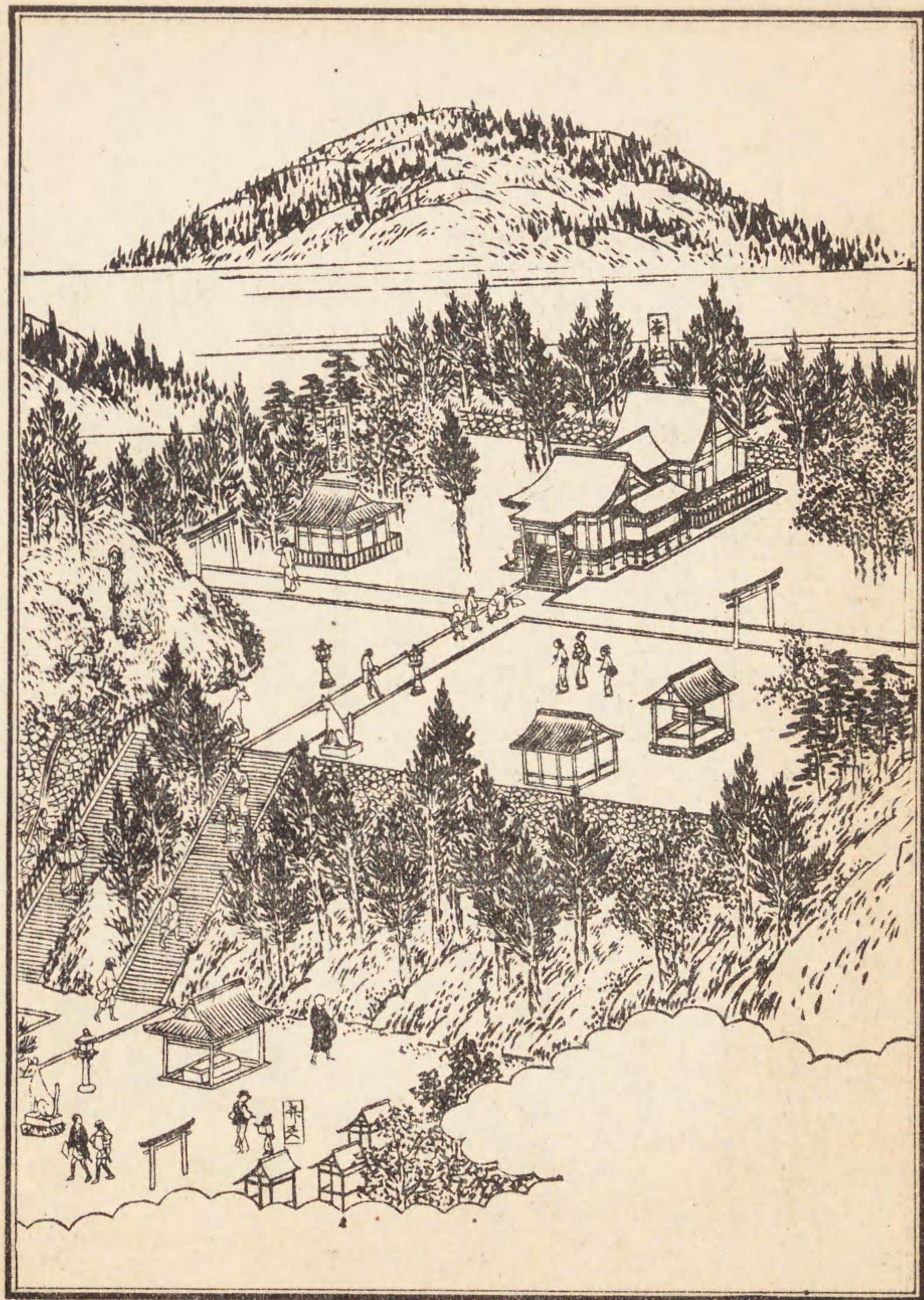
は此り一里餘あり

箕田

飯傍社祀者老あり融大匠の後胤箕田孫吉綱の古跡あり今八岐

熊谷の秋松之く戸田八所村之くむらぎ原之く右の方は山王  
の祠ありこまき原上むらぎ原ありて茶店ありまゆむらぎ  
河間峯身あり中井村箕田村をこまき原の驛より







鳴栗

桶川まで一里二十町 尚秋三十四町 民衆相對して 蒼々として  
あり其形散在して 傍居する宿小葛味神の角 海河り  
又之本の杉林大竹の林河りたの方に 鉾林希く日光山の道有又  
ろ小勝願寺とろ 浄土宗十八檀林の一ヶ寺河り 東ひく三軒堂  
松通く上田村に薬作堂あり 又濱岡宮より小元徳集より河り 又  
神の細あり 彦門寺ありとろ 勢田の村を過て 桶川の河り  
上尾まで二十町 尚秋三十四町より 民衆相對して 蒼々たる河り  
後念寺とろ 寺あり 又岩付の道くあり  
け 秋成とろ 所屋村あり 此方より 窪村より 雷電ふくく 林あり  
この月より 雷電の角 海河り 門本村あり 瓜とろ 畑村あり 賀茂村  
あり 上尾の駅より

桶川

上尾

大宮まで二里八町 け 駅より 川越道 岩付道 日光道あり 左の  
方より 濱岡河り 此方より 勢田河り 勢田河り 勢田河り 賀茂村あり

大宮

賀茂河り 音登村の草村土手河り 大宮の駅より

氷川

浦和まで一里十町 宿の入口より  
東光寺とろ 禪刹あり  
氷川神社 大宮の駅より 新嘗武蔵國一宮と稱れ  
祭神 素盞烏尊 此所の生土神

女躰社 幸社の方より

五山社 大宮の駅より 中山社 麓山社 正勝山社

金鑽社 幸社の方より

氷川王子社 神休の傍より

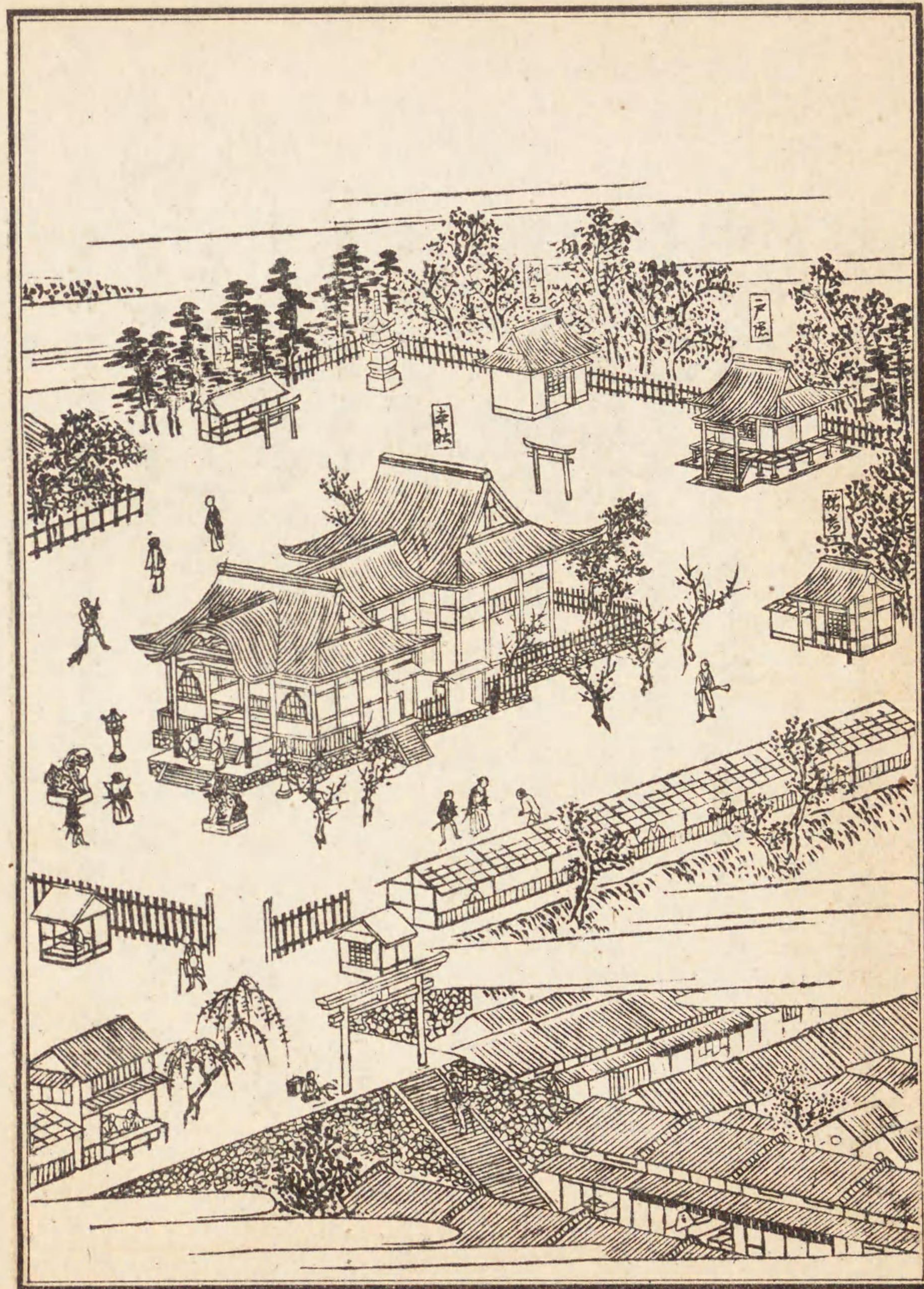
末社 住吉社 布留社 神明宮

神樂殿 地の東にあり 幸地堂 地の西より

不動堂 日所より

夫當社 尚國の一之宮あり 社頭廣く 神志の池あり 反橋あり













江戸  
市  
府  
御影堂  
名代



御影堂  
名代  
千里  
御影堂  
名代





江戸日本橋より二里はなれ中仙道の東橋より十所許あり  
所々小丸懸店茶屋形々紅粉を懸く花替はうけぬく  
美艷をかける格子のうらゆけく旅客とあそぶとれとあれと  
花と真なるも多し

類聚

思ひこころもなやめたれはせむ川より流と玉章 頼政

平塚昭神社

板橋の東の方平塚山あり  
別当安樂院藏官寺と号し  
八幡を即義家實成少即義頼朝三郎義光の三霊を  
奉りて三社とせん

系神

幸社の後あり義家の體を  
奉りて三社とせん

禮塚

板橋の東の方平塚山あり  
別当安樂院藏官寺と号し  
八幡を即義家實成少即義頼朝三郎義光の三霊を  
奉りて三社とせん

王子社

王子村あり別當と  
東院金輪寺とせん

系神 慈野三所神

寛永十一年 宮家 津造を林道春其記を書け 銀系七月  
十三日寺中十二坊踊をゆい

稻荷社

金輪寺の支那あり

飛鳥山

抹生の頃と雲と見く雲と散ふ花はほも神をえりぬ  
白ひふ衆は夜ぬけに家落はたふと多しりぬ

無風花韻

富士権現

駿河の山あり  
別當泉院藏官寺と号し  
八幡を即義家實成少即義頼朝三郎義光の三霊を  
奉りて三社とせん

神明社

別當泉院藏官寺と号し  
八幡を即義家實成少即義頼朝三郎義光の三霊を  
奉りて三社とせん

田畑八幡宮

別當泉院藏官寺と号し  
八幡を即義家實成少即義頼朝三郎義光の三霊を  
奉りて三社とせん

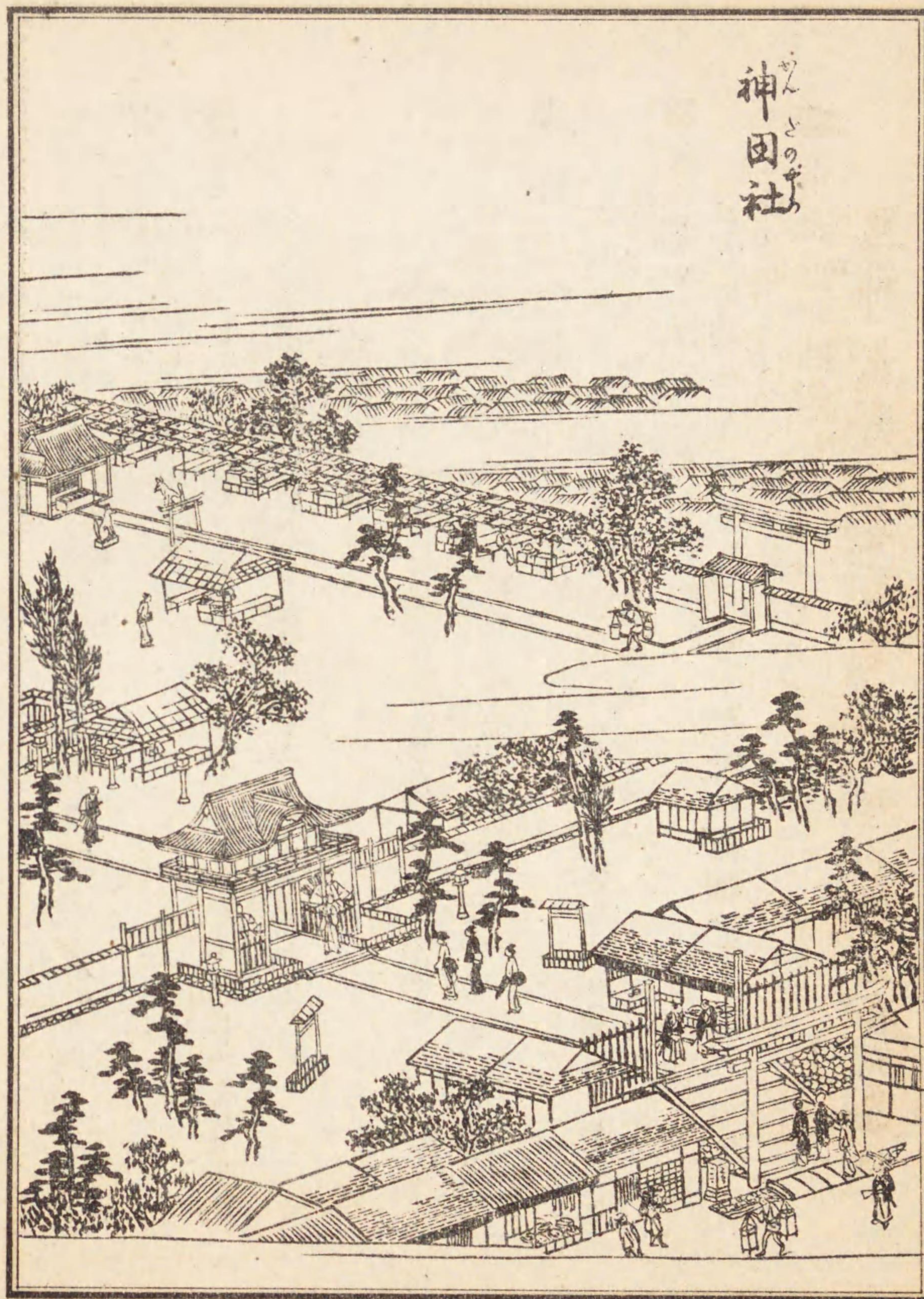
根津社

別當泉院藏官寺と号し  
八幡を即義家實成少即義頼朝三郎義光の三霊を  
奉りて三社とせん





神田社





都社を今の中より東の方へ移す本構の板は、今あり文明  
年中、中田道備の茶屋に定む三年の以、家室より移す  
社遷すありたりあり、祭九月六日  
湯鴻 天満宮 湯鴻ありあり、別當北野山喜見院

系神 菅公 祭日二月十日 十月十日あり

戸隠 明神 地主神ありあり

笹塚 稻荷社 地主神あり

妻意 稻荷社 湯鴻ありあり

系神 日本武尊 橘姫 倉稻魂神 三座瓜紀伝

日本武尊系神ありあり、橘姫、倉稻魂神、三座瓜紀伝、妻意、稲荷社、湯鴻ありあり

神田社 湯鴻ありあり

系神 大己貴命 神田社 湯鴻ありあり

持門の靈を祀り、神田社、湯鴻ありあり

意治あり、今も系神の時に神農を祀り、かの所ありあり

新築ありとを、和二年、當所小社あり、祭九月十五日、系神の神、祭あり、四年の役、祭より出、勅に

牛頭天王三前 神あり

住吉明神 神あり

人丸明神 神あり

末社 神あり

聖堂 湯鴻ありあり

文宣王 祭十哲を祀り

祭日二月八日の内上丁日行あり

柳奉朝釋奠の始、文武天皇大室元年二月丁巳日あり

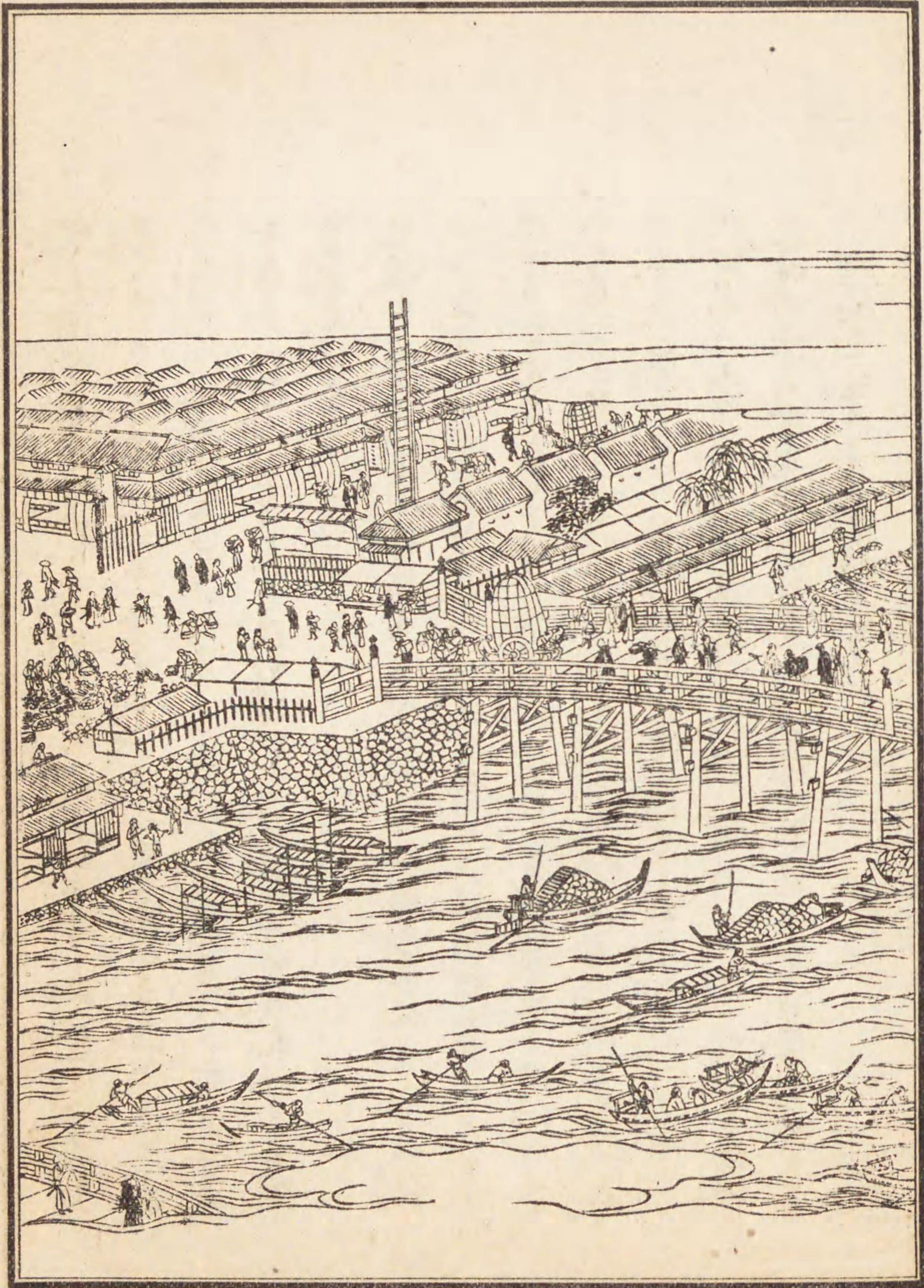
行各終ふ其後、光仁天皇寶龜二年、右大臣吉備公、釋奠の具

式、器、物等、敬言、小、同、色、一、終、奉、續、日、奉、紀、見、見、す

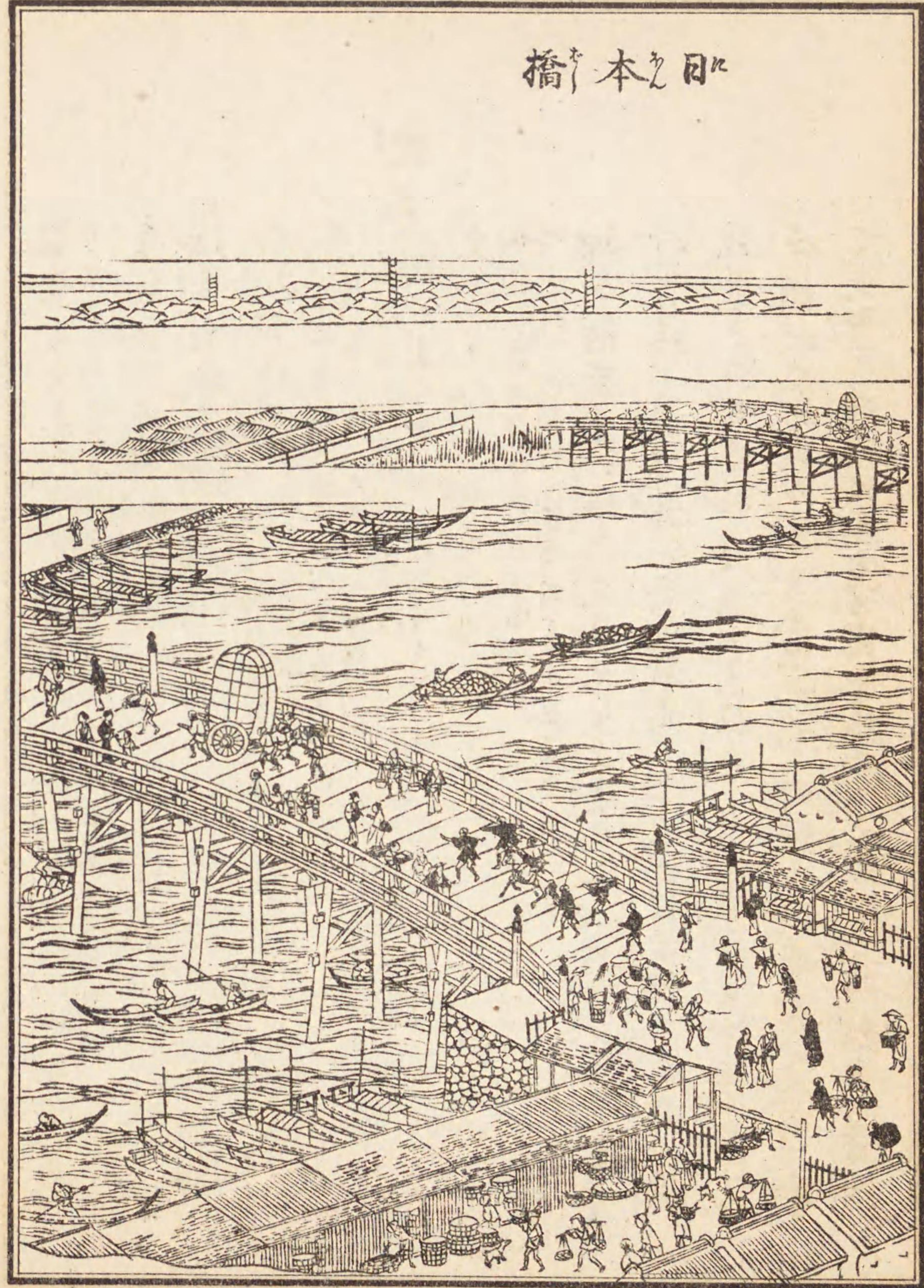
奉朝、釋奠の式、奉、享、日、未、明、五、列、奉、社、令、其、屬、乃、以、廟、司、と、奉

て、先聖の神座、於、廟、室、の内、中、楹、の、間、に、設、く、先師、顔、子、と、首座





橋之本





中一岡子騫より以下丹有までと傳く四座より一文宣王の東より  
 設て西と上座より又東路より已下子夏まで五座は文宣王の  
 西に設て東に上座と伝へ十一座何れも南より二牲其外魚  
 類等と六衛府よりこれを進む陳設の品を執事の貞敷何れも延  
 喜式も詳あり

板橋をさぐる左木川越道あり右木難同谷護國寺四谷下の道  
 あり直木は平尾村をさぐる集鴨所は三場の集所ありたり  
 六地蔵堂ありと傳ふる馬場の所よりさぐるは窪谷とて竹所の左  
 の方より山権現の所より傳ふるを傳ふる退かぬ所は右岩淵日光道右  
 を幸御爲さるる日幸橋より一里の道一森川宿は通て幸郷  
 六所あり又所目本神田の所より傳あり神田宿は左の方より湯宿  
 五神の中より伝ふる右の方より聖堂筋遠橋の所見附をへる  
 十町伝をさぐる日幸橋より傳ふる

日本橋

けさの瑞宿より一兩日親とて傳ふるより傳ふる船小のりて  
 かくの秋路伝ふる伝ふるの本宿より所より傳ふるして神橋乃  
 伝ふる香取の神社息栖の神と傳ふる一傳ふるて船より下りて  
 舟とて三日逗留して神社名所伝ふる先より又船より下りて  
 板久牛伝ふるを伝ふる麻生伝ふるを伝ふる並も宿より下りて  
 行舟伝ふるを伝ふる小畑より十二塚と登りて流波山も宿より  
 の秋路と傳ふる日光山よりひよ中釋寺二荒より登りてさくら  
 伝ふるを伝ふる

新古 武蔵野の木の果てをたのむ風のまよひん 通光  
 日 舟末を伝ふるをひよこれ武蔵野のまよひん 柳原の宿  
 新橋 舟此伝ふるをひよこれ白雲の舟伝ふるを武蔵野の宿

木曾路名所圖會卷之四終







足沢歩一の草鞋土おへく類へ御申承に由六日乾の屋きこり  
 道のりありけ推んごり野徑をどくきて通ふ都のりて  
 頼まの白ををふたたびさ夕月ののりあはる雲もあはる  
 らん御八様へ入御し者也

八幡  
 下  
 総

釜ヶ谷まで二里八町は里の中より清水沢勢傳へて八幡宮をせ  
 終ふ所の生吉神といは道と東海道中へさへちひ籠りの  
 人少く道悪くして馬竹をすまらるる途の林苑あり村邑は  
 ちて所々も假息ありあはるはるちりてあはる  
 田原の女とをさるる早苗をたぬのすのふ川は河をい  
 揚上風をりて等の子の毛もうちらびと田原はれをいふ作を編  
 とくくして板根の卯のむきかたをすまらるる雪ふ所がふ群をい  
 くぬを常焼らむと海へさるるのむきかたをすまらるるあはる  
 通る人種りてはるる又あり新樹をるる障をいふ味

行徳河岸





金ヶ原

ひかりん

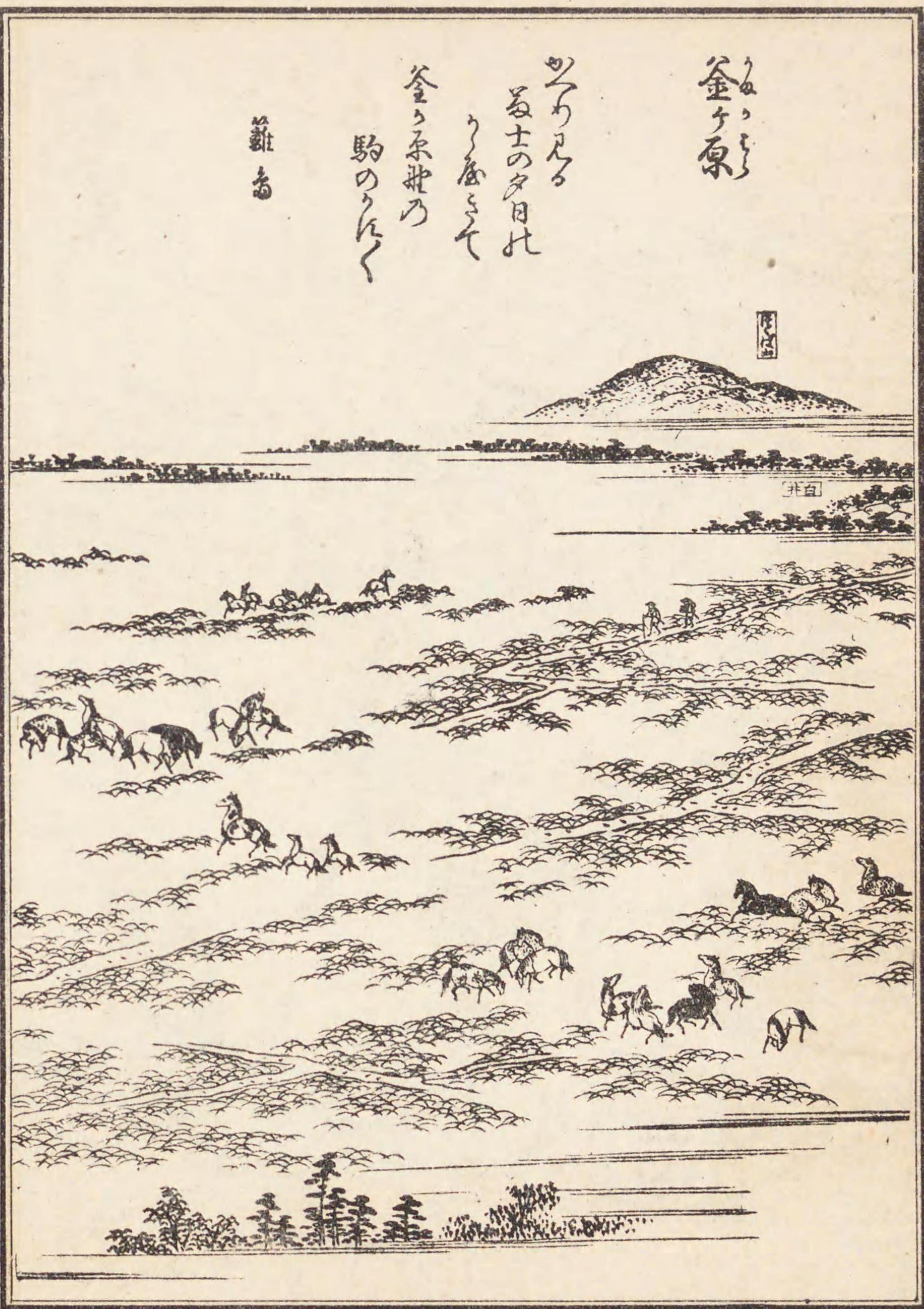
石士の夕日れ

うらみそて

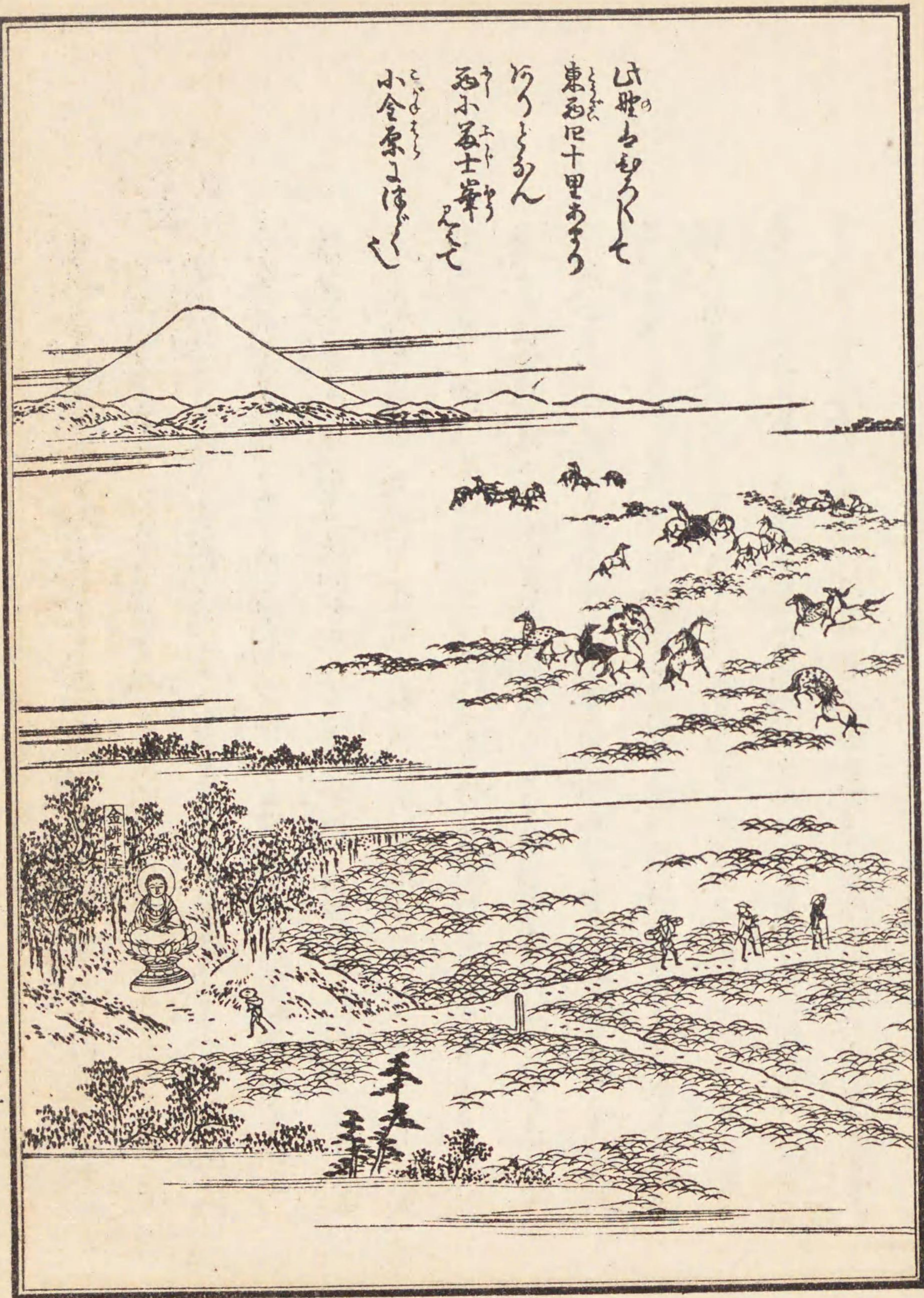
谷う赤井の

駒のうんく

難



けせうとせうりて  
東に十里あり  
りうとせうん  
石小石士  
小倉原





金谷

東の西りのきとみふおちふおち村南村のそと小田原城はる  
白井まで或をわけて邑里成てて田中成りた小見右小見と  
田園際たりある耕一何ん玉苗をそとてまばすへてお前入  
さぬいけくまわつてあたらふかあ山の中田舎の煙草ふまて子氏  
藤橋の器より用事水龍よりよりう痛敷と獲て夏の雨をそとて  
光との存くそと九種成てて三村成りしけ成る家持はむとあて  
林園より行る金谷原て小前小至成りし野を眺くそとて夏竹  
成りて風成度そと小田原の約むた十そと山成りし成りた何れも  
至成りてそとて成りてそとてそとて馬をそとて家持はむとあて  
公官の御馬もて馬寮のそとて小田原一駿馬成りし成りてありそと  
親馬成りし成りし成りし成りし成りし成りし成りし成りし成りし  
そとて成りし成りし成りし成りし成りし成りし成りし成りし成りし  
より西の方と頼むとそとてそとてそとてそとてそとてそとてそとて

下井

あさやふ見ゆるは府成まてつとつと又北の山にりてお前を  
まてしやいども書のを隠む斜脚をそとて小田原小田原を六日の入福小  
白井は御か  
大森まで二里は所を民長殿ゆて成りし成りし成りし成りし成りし  
二成りし成りし成りし成りし成りし成りし成りし成りし成りし成りし  
そとて野成りし成りし成りし成りし成りし成りし成りし成りし成りし  
お前成りし成りし成りし成りし成りし成りし成りし成りし成りし成りし  
村のはお小坂あり

下大森

本丸まで其町又野を邑民長成りてそとてお前成りし成りし成りし成りし  
て頼むるを農家成りてそとてそとてそとてそとてそとてそとてそとて  
藤橋までお前成りし成りし成りし成りし成りし成りし成りし成りし成りし  
成りし成りし成りし成りし成りし成りし成りし成りし成りし成りし成りし  
けお前成りし成りし成りし成りし成りし成りし成りし成りし成りし成りし

下本丸





木曾路名所圖會

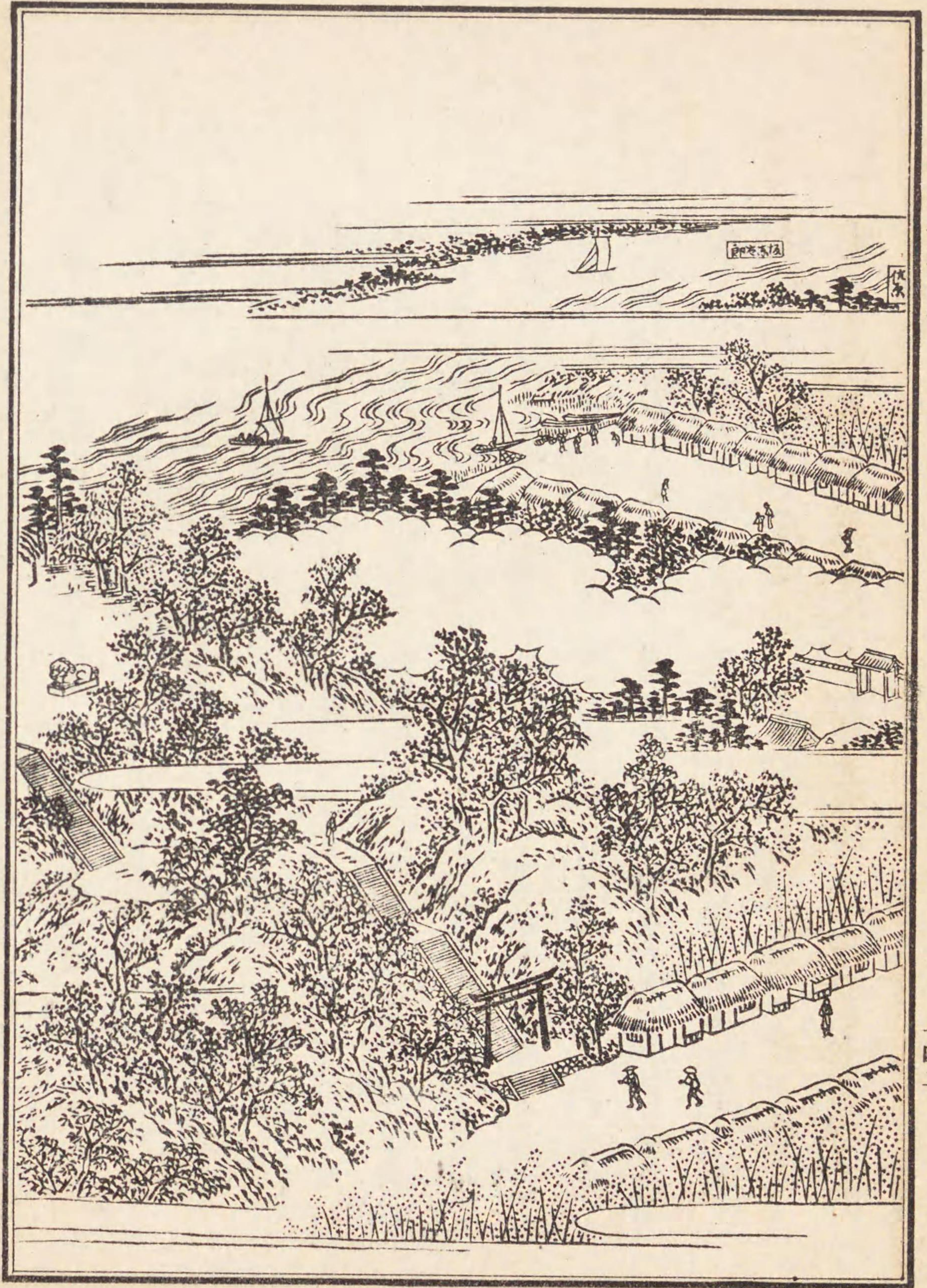


木曾路名所圖會









神壽社

沖集  
 仲垣代  
 四万の庄屋  
 頼む舟  
 とうきよ  
 こぼの  
 龍のつ  
 龍のつ













御供所 本社の右

樓門

豐殿の右あり

香取山寺

右

諸神塚

神代卷云

伊弉諾尊拔所帶十握劍斬御突智劍及垂血

是為天安河邊所在五百箇磐石也即此經津主

又云

神之祖矣

又云

高皇產靈尊更會諸神選當遣於葦原中國者

又云

曰磐裂根裂神之子磐筒男磐筒女所生之子經

又云

津主神即令平定葦原中國而後皇孫天降云

又云

天神遣經津主神武甕槌神使平定葦原中國是

又云

時齋主神彌齋之大人此神今在東國攝取之地

也

齋主祭神之主也經津主神別稱攝取地名在東

神書抄云

齋主祭神之主也經津主神別稱攝取地名在東

海道下総國一作香取今為郡名故經津主号香

天書云

取明神是春日第二神殿也

經津主神者天之鎮神也其先出自諾尊初諾尊

斬遇突血成赤霧天下陰闇直達天漢化為三百

六十五度七百八十三磐石是謂星度之精也氣

化為神号曰磐裂是謂歲星之精裂生根去是謂

熒惑之精去生磐筒男是謂太白之精男生磐筒

女是謂辰星之精女生經津主是謂鎮星之精

是謂社の地也先新勲也の社傳云神代の法有あ七神武天皇

元奉法宮より舞臺とをまゝ例祭の四月八月十月小歳をまゝ

いんぐわ社に一千石之福宣香取上総分少利安を儲芳深ふと云

社地廣くして為小橋人多く門前の善人茶店をわく又少房を

多し夏秋の頃と芝居相撲あつては所の徳ひと相まらぬ





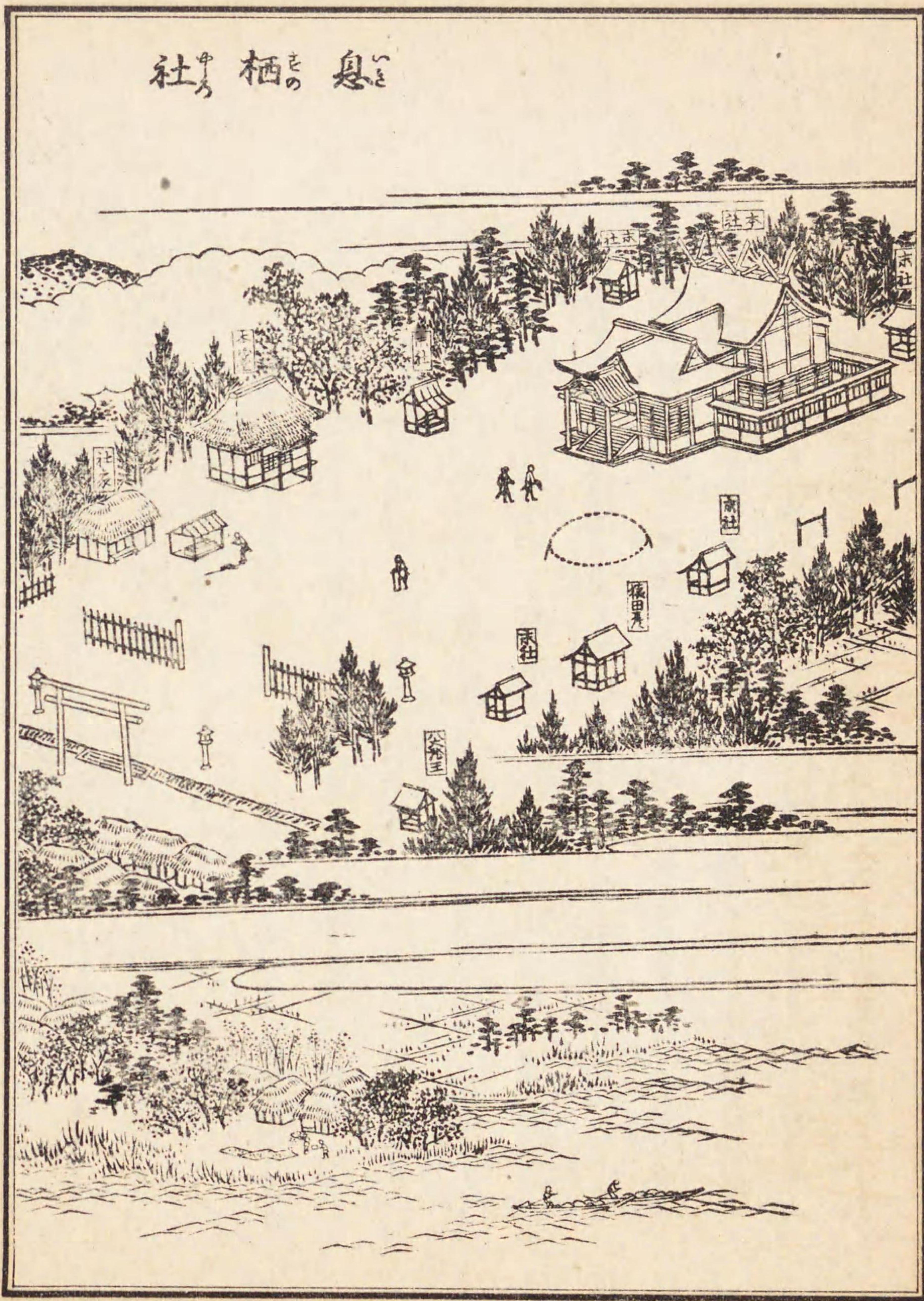








息の栖社







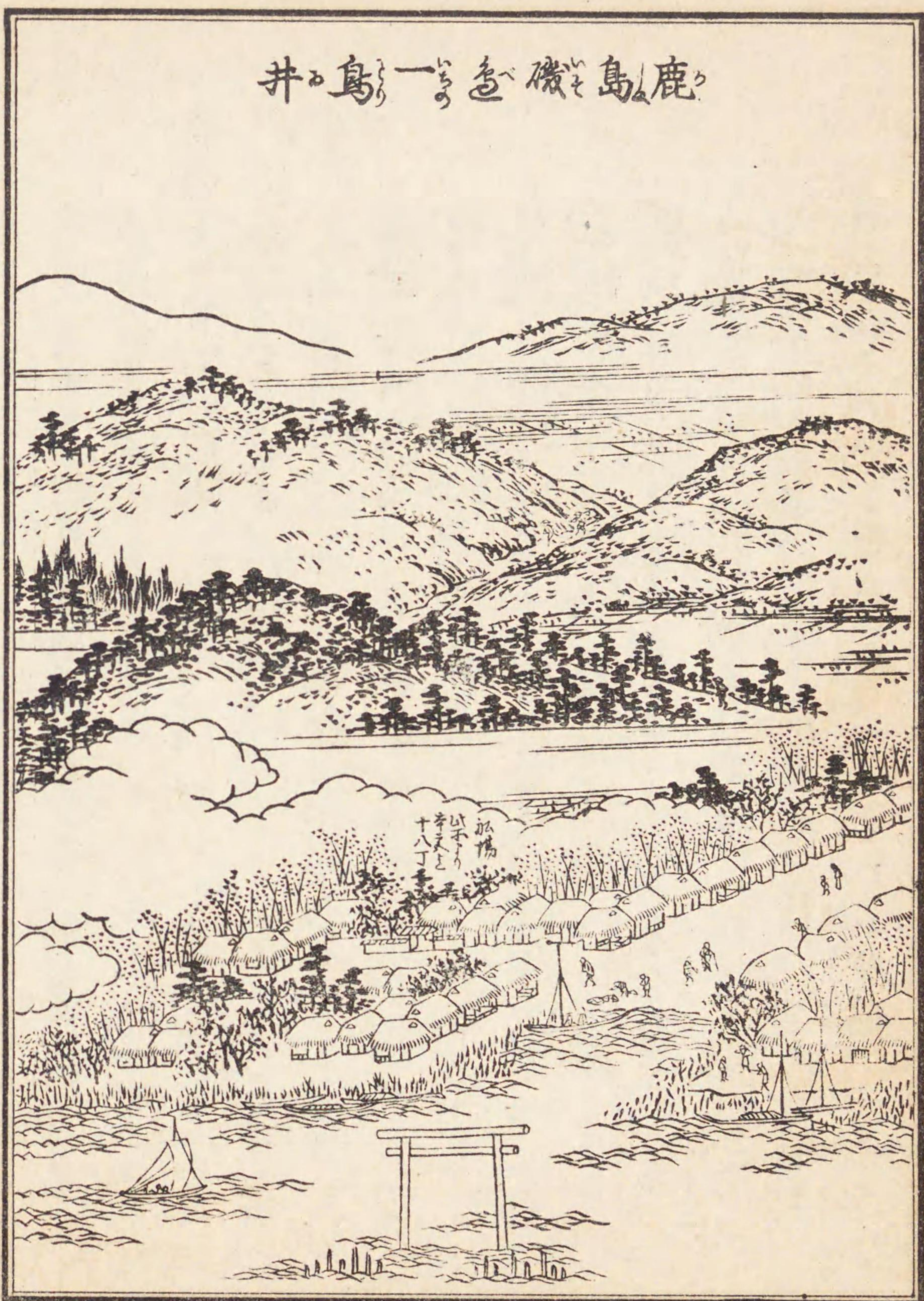








鹿島磯色一島井



















麻呂  
みたりし  
神の  
めらふ  
雑島



二月 月次神幸七座 淨神儀持  
 三月 月次神幸七座  
 日 廿日 一万燈神幸  
 四月 初日より十五日まで 奉社并末社神幸  
 五月 初月の毎日より 尚月五日まで 神幸流落馬あり  
 六月 月次神幸五座  
 日 毎日 名越後  
 七月 三日 平國の神幸 始浄門出神幸ともいふ  
 日 七日 七穂神幸 土用干神寶 瓜腹  
 日 十日 十一日 十二日 平國神幸  
 八月 新嘗會神幸  
 日 月次神幸七座

九月 九日 重陽三神幸 相撲舎あり  
 日 月次神幸七座  
 十月 亥日の神幸  
 十一月 朔日より十五日まで 奉宮并末社神幸  
 日 月次神幸七座  
 十二月 初午三日神幸  
 日 廿七日 茶末の神幸  
 日 月次神幸  
 下畧  
 浄経塚 奉社の後ふあり又井の馬場ありあり  
 廣圓寺 親善堂あり 浄経塚あり 浄経塚あり 浄経塚あり  
 鹿嶋放城 奉社あり 六郎宗幹あり 浄経塚あり

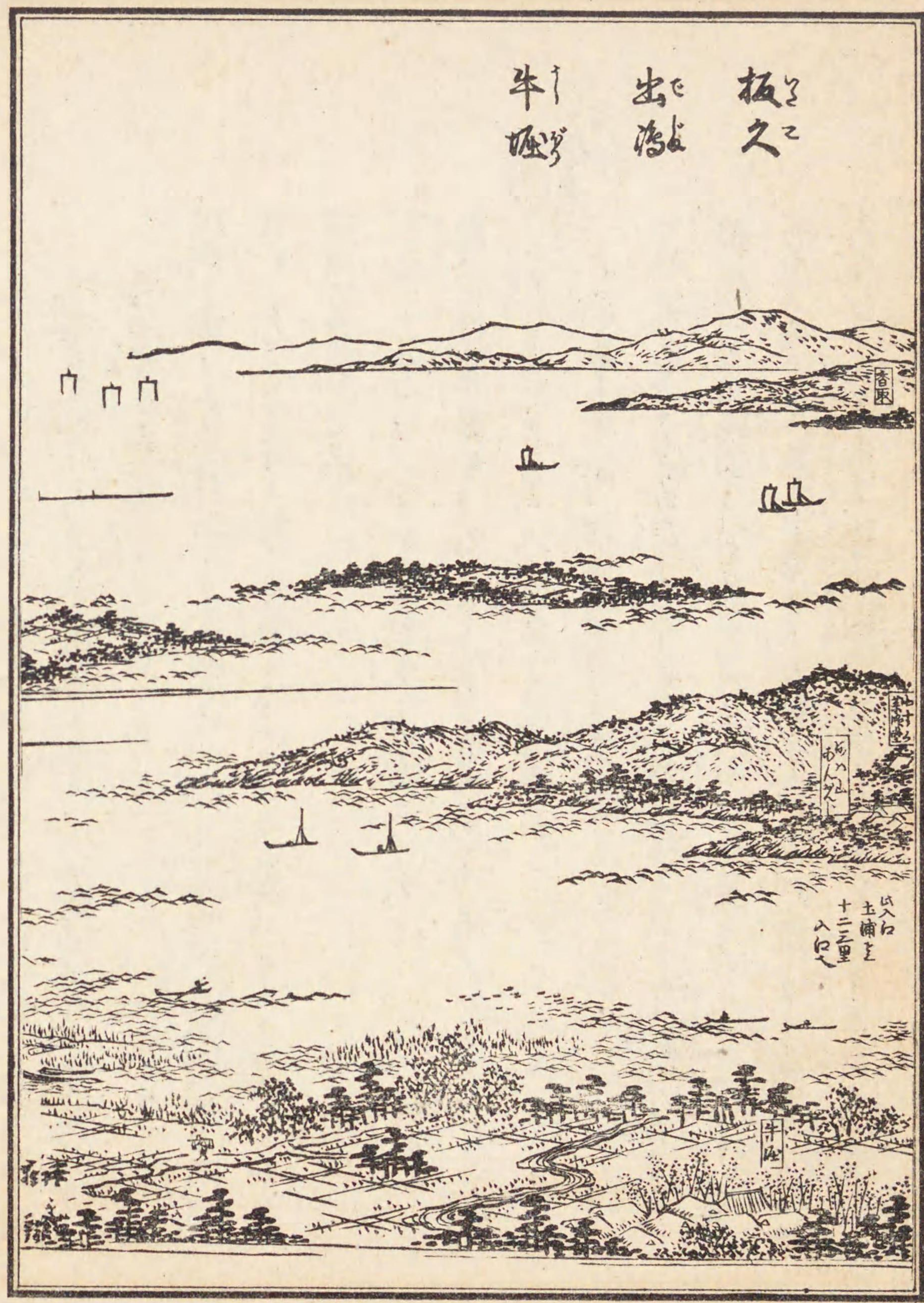






















碑あり守山居士清允明撰に安永八年夏四月三日を建ちしり  
新しん碑史文を畧し日いつくを頼るに袖袂を之存して流流波の  
山下あり

十三塚

流波山上に十三塚あり其の里少くは山家もく畧畧もまうり  
これよりゆてゆく道あり道と浮標とて若角雀鬼より謝靈  
運向山の峯に登る小本庵を看す竹庵にをせし海を茶藨をまうり又  
下ゆるとは後蓋成をせし又蘭亭記云會稽の山陰葉亭中今に  
此地葉山後成竹林修行あり又流波の同小陣邊ありまけらるのよ  
北せんや

流波山中禪寺

流波郡の南に三郡小侍の禪寺あり  
禪あり南法陽峯とて北を法陽とて八圃の  
相撰上座陸奥寺祝とある坂東寺堂の名嶽たりとて右今の所  
もを流波とてたつたあり流波小浦にありて月日流波ありとて志流

登りたるふたどまうり流くみまひてけりて流くありて  
志流しめりてまうりありてまうりありて流くありて流波あり  
わけ多き君と稱ひし流くみ身まをれとてありて流波あり

流波郡の峯にありて流くみ身まをれとてありて流波あり

流波郡の峯にありて流くみ身まをれとてありて流波あり

流波郡の峯にありて流くみ身まをれとてありて流波あり

流波郡の峯にありて流くみ身まをれとてありて流波あり

流波郡の峯にありて流くみ身まをれとてありて流波あり

流波郡の峯にありて流くみ身まをれとてありて流波あり

男辨神社

流波郡の峯にありて流くみ身まをれとてありて流波あり



系神 伊弉諾尊  
女辨事社 改葬小姓を祀る

系神 伊弉冊尊

日讀尊社 月讀尊社 素盞鳥尊 蛭見尊 共小野原

二神の幸系 別業より女筆あり

千手窟 山嶽母

鸚鵡石 赤松の系に

安座石 洞窟 徳田大士 持命の山にあり

白雲滝 女辨の山にあり

羨那濃川 別業の山中にあり

後撰 けくぬの峯より流るる川の系をけくぬとて別業あり

新撰拾 小泊の系よりわたりぬる河をけくぬとて別業あり

後拾 流るる河の系よりわたりぬる河をけくぬとて別業あり

後撰 流るる河の系よりわたりぬる河をけくぬとて別業あり

新撰拾 美那濃川系より流るる河をけくぬとて別業あり 正三巻  
櫻川 美那濃川の系より流るる河をけくぬとて別業あり 正三巻

後撰 常とをきききふふと梅川の系より流るる河をけくぬとて別業あり 正三巻  
大御堂 流るる河の系より流るる河をけくぬとて別業あり 正三巻

千手観世音 千手の系より流るる河をけくぬとて別業あり 正三巻

三重塔 大日如来あり

岡山塔 岡山徳田大士を

薬師堂 安座あり

太子堂 聖徳太子を

求聞持堂 大日如来あり

聖天宮 山の系より流るる河をけくぬとて別業あり

泊陸堂 日所あり

男辨鳥居 南の系より流るる河をけくぬとて別業あり



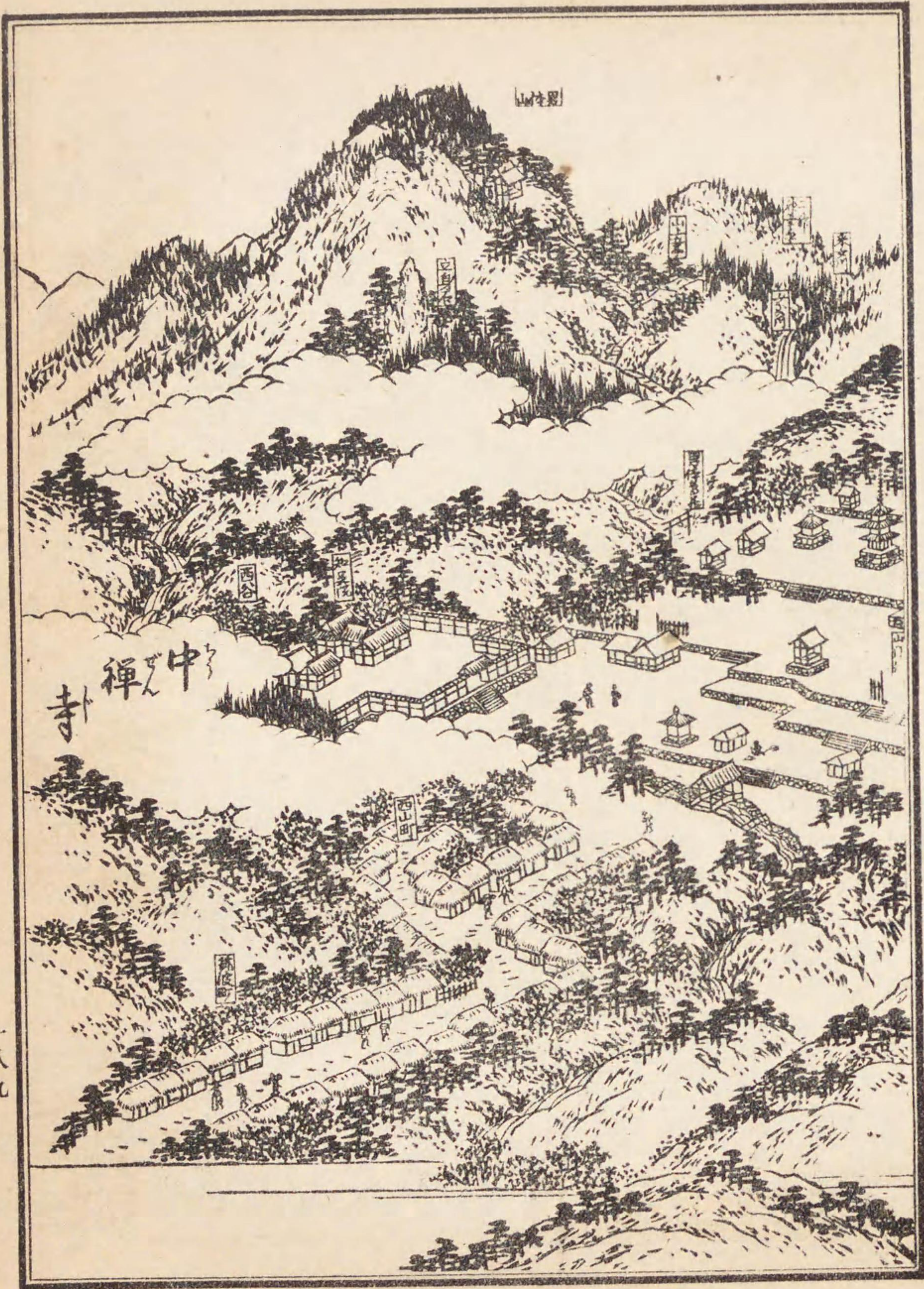
女群島居女のむら

妻山は京奉名流波と書さゆゆ東海運流と波ありて後  
 波小堤防を築くは往來遊ふこれゆゆと築波也書ん後人記して  
 流波と名づく二神登山はゆゆと水波を産給乃海上遊けりゆゆ  
 舟はゆゆと書さゆゆと後人皇天十代桓武帝の時相法相乃名師徳  
 徳大士ゆゆと書さゆゆとこれゆゆとゆゆと二柱乃所林と記す其外  
 所高柱のゆゆと書さゆゆとゆゆとゆゆとゆゆとゆゆとゆゆとゆゆと  
 ゆゆとゆゆとゆゆとゆゆとゆゆとゆゆとゆゆとゆゆとゆゆとゆゆと  
 ゆゆとゆゆとゆゆとゆゆとゆゆとゆゆとゆゆとゆゆとゆゆとゆゆと  
 神取佛國傳存にゆゆと書さゆゆとゆゆとゆゆとゆゆとゆゆとゆゆと  
 記表流形ゆゆと男作女作のゆゆとゆゆとゆゆとゆゆとゆゆとゆゆと  
 ゆゆとゆゆとゆゆとゆゆとゆゆとゆゆとゆゆとゆゆとゆゆとゆゆと  
 真云秘卷乃雲場とて兜率の内院此に補陀洛山と書さゆゆと  
 男作女作れ峯よりゆゆと一流乃流るなり是城兵非流河也

小畑  
 法雲寺  
 筑波碑







山波流

